

I はじめに

第1章 計画の策定にあたって

1 計画策定7つの視点

第6次広尾町まちづくり推進総合計画（以下、「本計画」という。）は、次の7つの視点で策定しました。

I 町民との協働による計画

町民に対し、計画の作成段階から情報提供を行い、その共有化を図るとともに、町民の参画機会をできるだけ多く取り入れ、共通の認識のもとに協働し、町民の意思に沿った計画づくりを進める。

II 町民にわかりやすい計画

施策の成果や達成状況を検証できるよう、成果指標として明確な数値目標を設定するとともに、町民の参画のもと、町民の視点に立ったわかりやすい計画づくりを進める。

III 将来人口を見据えた計画

「広尾町人口ビジョン¹」で推計している本町の将来目標人口は、令和27(2045)年に約3,600人で、これを実現するため、「広尾町総合戦略²」に基づき、様々な人口減少対策に取り組んでいるものの、これからも人口減少が続いていくことが予想される。そのため、本計画にあっては、これまで以上に人口減少対策に重きを置くとともに、人口が減少していくという現実を受け止めながら計画づくりを進める。

IV 社会情勢や住民ニーズを踏まえた計画

我が国の共通課題である人口減少や少子高齢化により、労働力不足や社会保障負担の増加が進み、それに呼応して社会保障制度や税制が改正されるなど、地方自治体を取り巻く環境は変容している。新たな時代に向けて、目まぐるしく変化する社会情勢に的確に対応しつつ、多様な住民ニーズもしっかりと取り入れた計画づくりを進める。

V 地域資源を生かした計画

本町には、豊かな漁場や酪農に適した農地、物流ネットワーク機能で十勝の農業を支える重要港湾十勝港など、大きな可能性を持つ地域資源がある。人口減少などで地域経済の縮小が懸念される中、これらの地域資源を最大限に活用し、新たな産業の創出を含めた地域産業の発展を目指した計画づくりを進める。

Ⅵ 個別計画と整合性のある計画

本町は、「広尾町人口ビジョン」「広尾町総合戦略」「広尾町地域福祉計画」「広尾町地域防災計画」「広尾町公共施設等総合管理計画」など、各分野において様々な個別計画を策定している。本計画は、最上位計画として、これらの個別計画との整合を図りながら計画づくりを進める。

Ⅶ 第5次広尾町まちづくり推進総合計画の検証結果を反映させた計画

本計画の策定にあたっては、第5次広尾町まちづくり推進総合計画に基づいて取り組んだ各施策の成果や課題などを検証し、その結果を反映させながら計画づくりを進める。

2 行政計画から「公共計画」へ

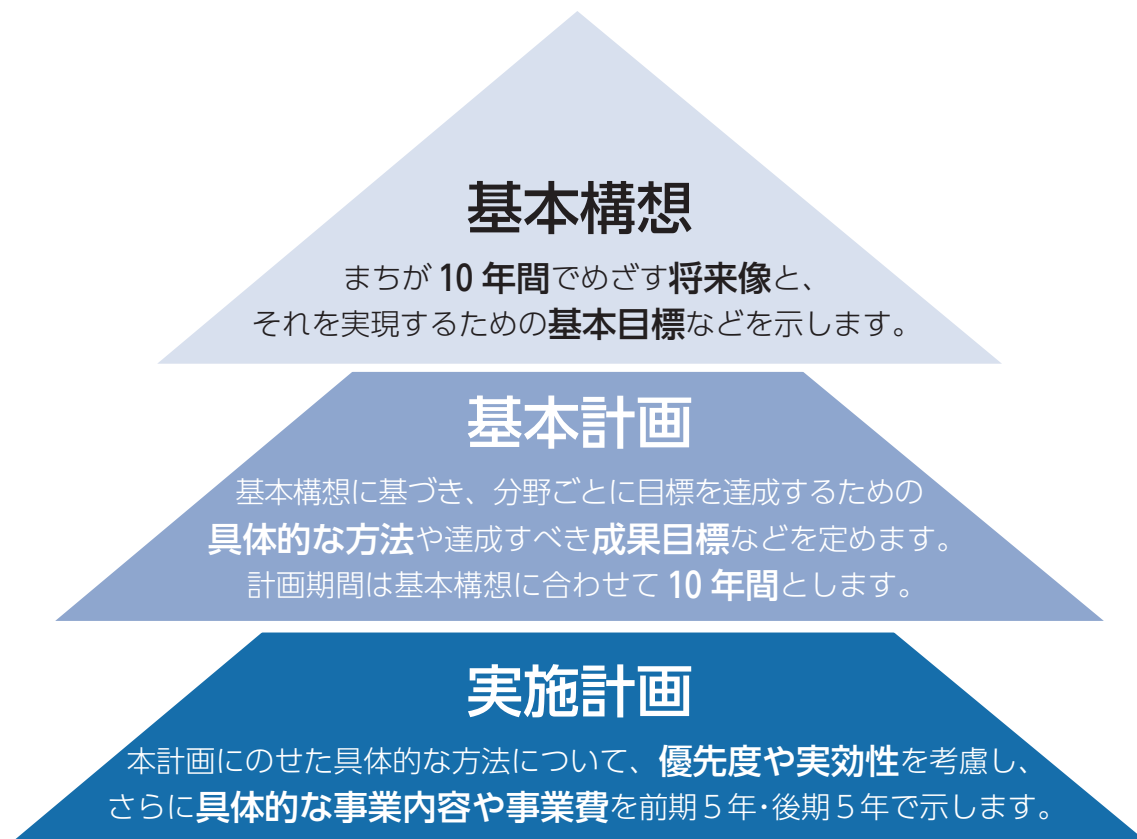
第5次までの計画は、10年後のめざす姿とそれを実現するために行政(町)が主体となり行うべき各種施策が記載され、町民、地域団体、事業者等に対しては、理解と協力を求めるにとどめる行政の計画でありました。第6次となる本計画は、町民や地域団体、事業者等と行政(町)が目標を共有し、それぞれが主体的に担うべき責務を記載した「公共計画」へと変化しています。

計画の位置づけ	計画の推進に責任を負う主体	計画が行動を求める対象と内容
公共計画	<u>地域のすべての主体</u>	・ 地方自治体、市民、地域団体、事業者等が共有すべき目標とその実現のために、それぞれが担うべき責務を記載。
行政計画	地方自治体	・ 目指すべき目標とそれを実現するために地方自治体が行うべき施策・事業を記載。 ・ 市民、地域団体、事業者等に対しては理解と協力を求めるにとどめる。

(出典：「基本構想策定義務付け廃止から5年 自治体総合計画の最新動向」より)

3 計画の構成と期間

本計画は、「基本構想」「基本計画」及び「実施計画」で構成し、それぞれの計画期間と内容は、次のとおりとします。



I 基本構想

本町がどのような姿になることが望ましいのか、その将来像とそれを実現するための「基本目標」と「政策」を示すもので、基本計画や実施計画の基礎となるもの。計画期間は、令和 3 (2021) 年度から令和 12 (2030) 年度までの **10 年間** とする。

II 基本計画

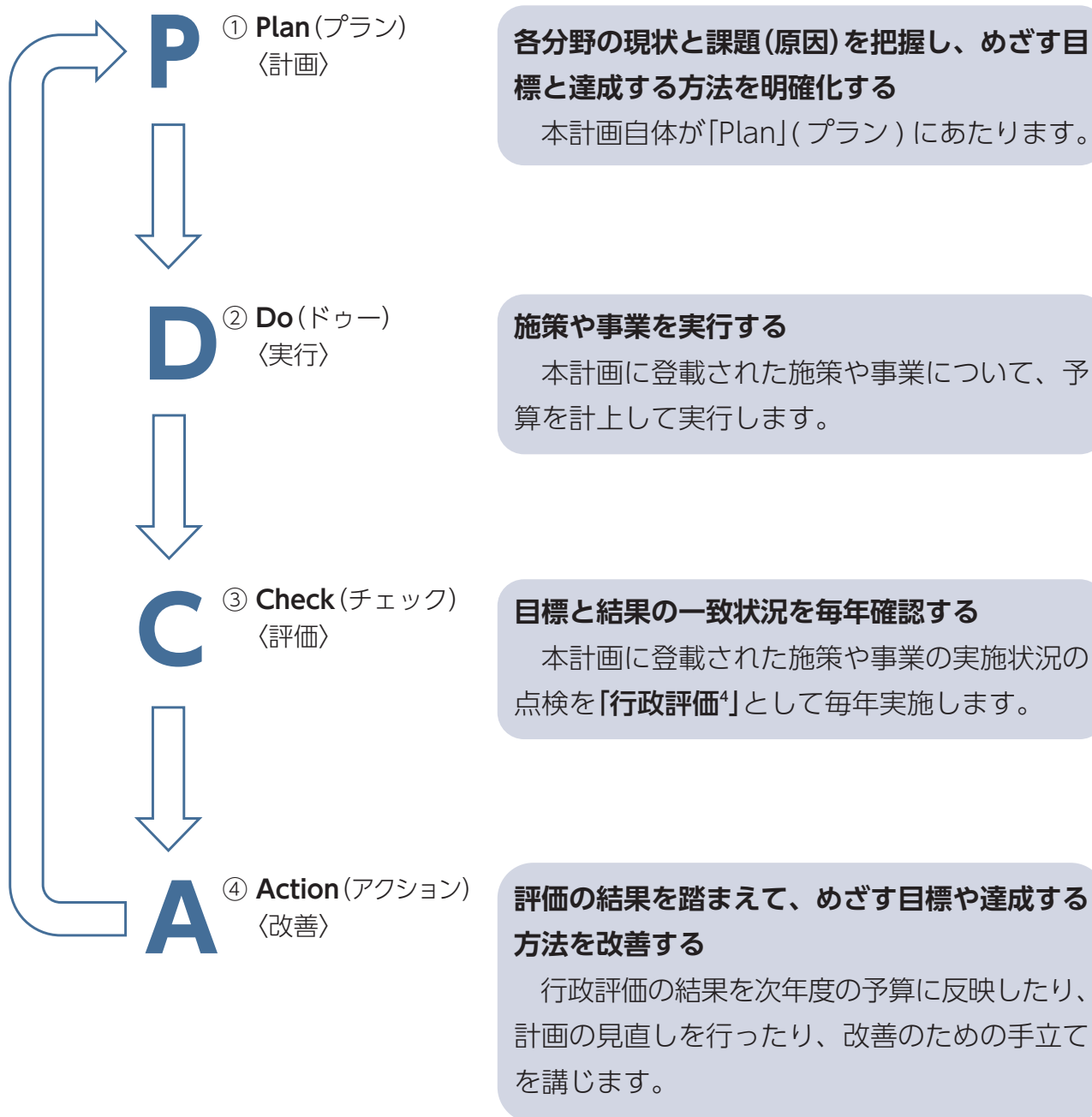
基本構想で示した基本目標や政策に基づき、「現状と課題 (現時点での結果と原因)」「10 年後のめざす姿」「成果目標」「目標達成のための具体的な方法」「施策を進めるにあたっての役割」を定めたものであり、計画期間は、基本構想に合わせて令和 3 (2021) 年度から令和 12 (2030) 年度までの **10 年間** とする。

III 実施計画

基本計画で定めた施策の優先度や実効性を考慮し、実施する主な事業の内容や事業費を示したもので、当初は **前期 5 年分** を作成し、5 年目に見直しにより **後期 5 年分** を作成する。町財政や社会情勢に弾力的に対応するため、毎年度のローリング方式とする。

4 計画の推進

本計画は、まちのめざす将来像とそれを実現するための「基本目標」と「政策」を明らかにしたものです。計画のマネジメントはPDCAサイクル³により行っていきます。



※このサイクルを毎年繰り返していきます。

第2章 計画づくりの過程

20名の委員で構成する「広尾町まちづくり推進計画委員会」は、町長から計画素案作成の諮問を受け、委員会内に設置した3つの専門部会が各分野の計画素案「たたき台」を作成。それを基に委員会が計画素案としてまとめ、令和2年5月に町長へ具申しました。また、町は、本計画に町民の考えを反映させる手法として、異世代、異業種の方などがまちづくりについて議論を交わすことを重視し、様々な懇談の機会を設けました。

1 委員会、専門部会の開催経過

I まちづくり推進計画委員会（委員20名で構成）

回数(年月日)	協議内容
第1回 (平成31年3月4日)	町が作成した計画策定方針を承認していただき、まちづくりアンケートの実施の説明を行いました。
第2回 (平成31年4月26日)	町長から委員長へ計画素案の策定を諮問し、委員会内に3つの専門部会が設置されました。また、まちづくりアンケートの結果を報告しました。
第3回 (令和元年6月10日)	各専門部会の部会長、事務局長、事務局次長の選任を報告しました。また、まちづくり懇談会等の開催について説明を行いました。
第4回 (令和元年7月16日)	計画の構成案を提案するとともに、次期人口ビジョンの基礎となる町人口動向分析及び将来人口推計の説明と、6月に開催した「まちづくり懇談会」の結果を報告しました。
第5回 (令和2年2月3日)	基本構想に掲げる「まちのめざす将来像」を決定したほか、基本計画の「計画素案」原案の審議を行いました。(基本目標1)
第6回 (令和2年2月25日)	第5次計画「実施計画」の見直しを審議したほか、前回に続き基本計画の「計画素案」原案の審議を行いました。(基本目標1～2)

第7回 (令和2年3月5日付)	新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、3月以降の会議を書面により行うこととなり、基本計画「計画素案」原案(基本目標3)を郵送し、書面により意見を求めました。
第8回 (令和2年3月24日付)	前回同様書面開催となり、基本計画「計画素案」原案(基本目標4～基本目標5)と重点プロジェクト案について、書面により意見を求めました。
第9回 (令和2年4月24日付)	第5次計画「実施計画」の見直しを審議したほか、基本構想と基本計画の「計画素案」について書面による最終確認を行い、確定しました。
第10回 (令和2年9月3日)	「計画素案」を基に実施した町内各団体との懇談やまちづくり意見公募の結果を踏まえた修正点を説明したほか、役場の各担当課における修正や、町長による最終的な政策判断を反映した内容について説明を行いました。

II 専門部会(委員20名、職員20名、高校生3名で3つの部会を構成)

回	部 会	開催日	内 容
第1回	第1専門部会	令和元年5月22日	部会長、事務局長及び次長を専任し、まちづくりワークショップ【第1回】を開催しました。
	第2専門部会	令和元年5月22日	
	第3専門部会	令和元年5月15日	
第2回	第1専門部会	令和元年6月10日	まちづくりワークショップ【第2回】を開催しました。
	第2専門部会	令和元年6月10日	
	第3専門部会	令和元年6月10日	
第3回	第1専門部会	令和元年7月11日	「まちのめざす将来像」について話し合ったほか、基本計画素案のたたき台の審議方法について説明を行いました。
	第2専門部会	令和元年7月18日	
	第3専門部会	令和元年7月12日	
第4回	第1専門部会	令和元年8月9日	重点プロジェクトの検討と基本計画個票の内容について協議を行いました。
	第2専門部会	令和元年7月30日	
	第3専門部会	令和元年8月7日	
第5回	第1専門部会	令和元年8月29日	重点プロジェクトの検討を行い案が完成したことと、基本計画個票の内容について継続協議を行いました。
	第2専門部会	令和元年9月6日	
	第3専門部会	令和元年8月26日	
第6回	第1専門部会	令和元年9月18日	重点プロジェクト案の最終確認と、基本計画個票の内容について継続協議を行い、「たたき台」の方向性が概ねまとまりました。
	第2専門部会	令和元年10月2日	
	第3専門部会	令和元年9月26日	
第7回	第3専門部会 Aグループ	令和元年10月18日	基本計画個票の内容について追加の協議を行い、「たたき台」の方向性が概ねまとまりました。

2 まちづくり町民アンケートの概要

町内に在住する満16歳以上の町民の中から無作為に抽出した1,400人にアンケート用紙を郵送し、発送数1,397通(3通未到達)のうち、573通の返送をいただきました。

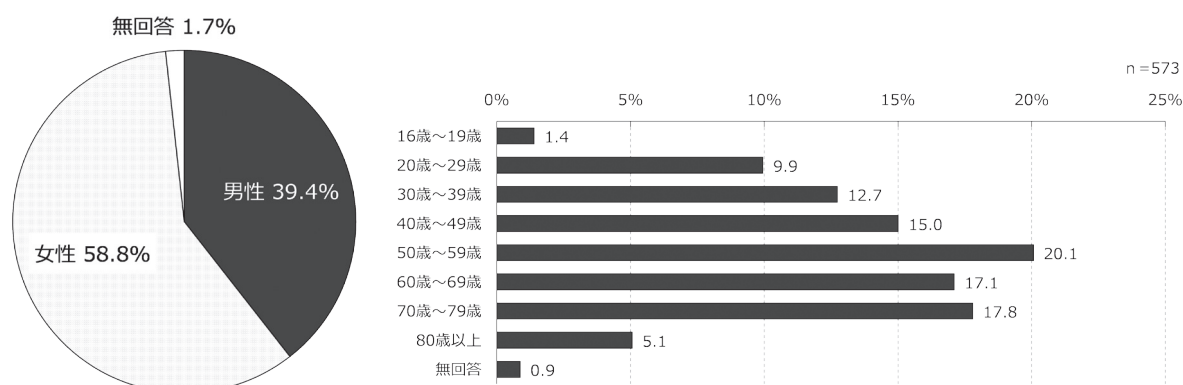
●調査期間：2019(平成31)年2月16日～3月4日

配布・回収状況	発送数	回収数	有効回答数	有効回答率
	1,397票	573票	573票	41.0%

※アンケート結果の全体版は、広尾町公式ウェブサイトで閲覧可能。

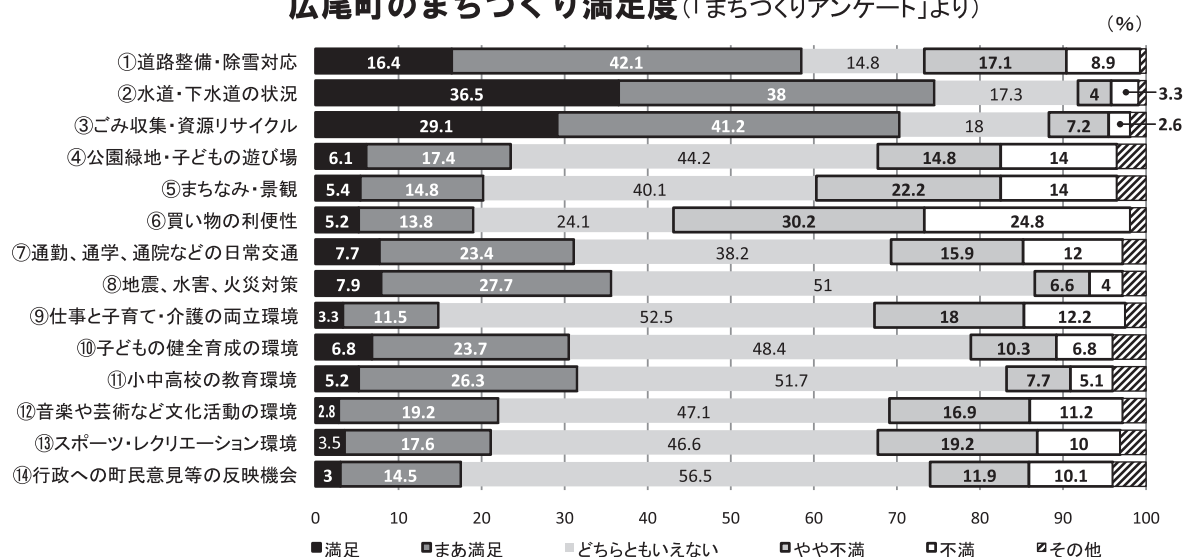
まちづくり町民アンケートの結果(一部抜粋)

回答者の性別・年齢

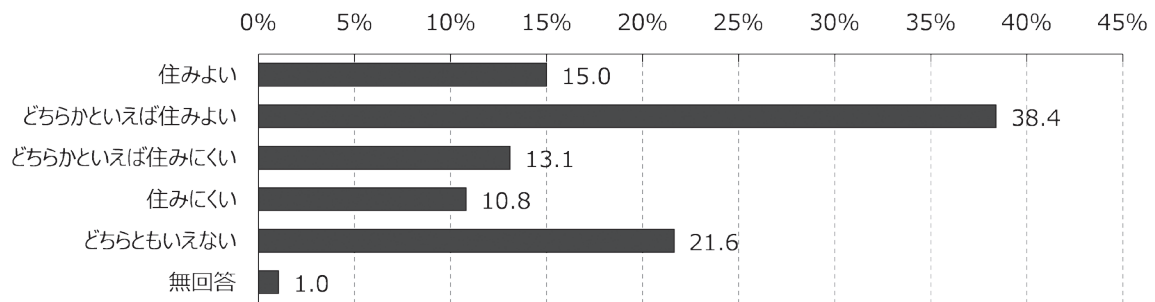


広尾町のまちづくりなどについて

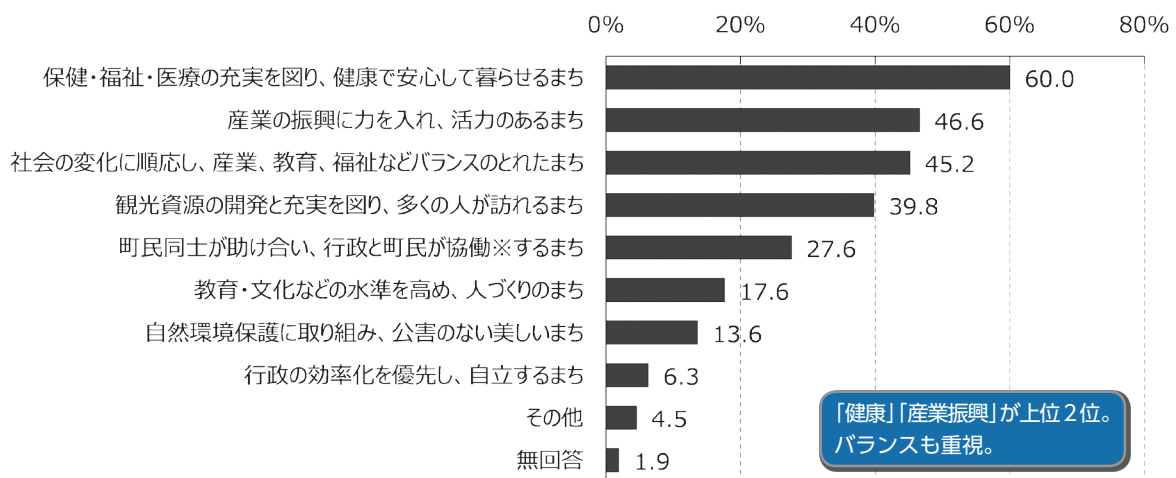
広尾町のまちづくり満足度(「まちづくりアンケート」より)



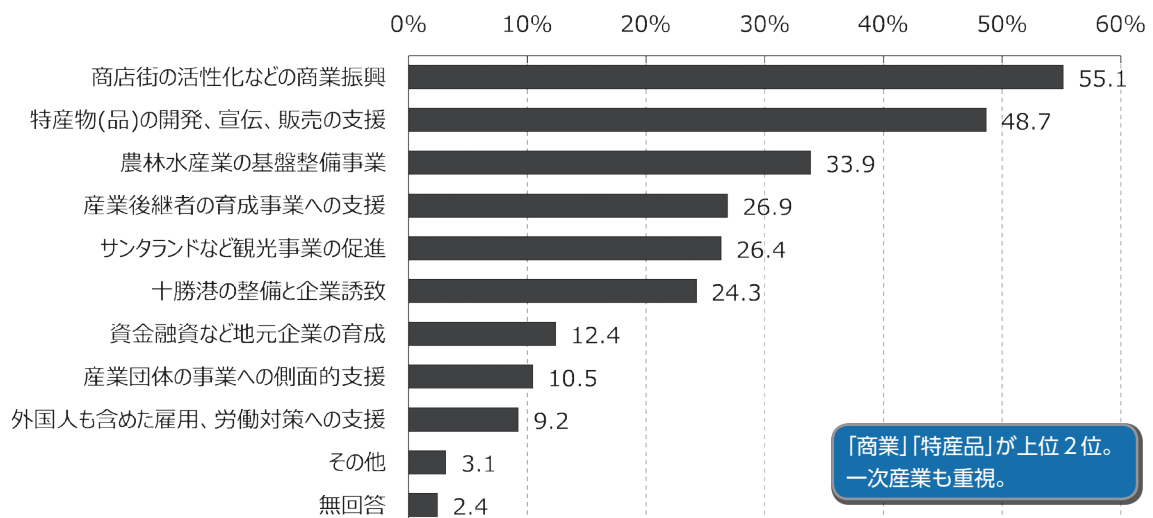
広尾町はすみよいまちだと思うか



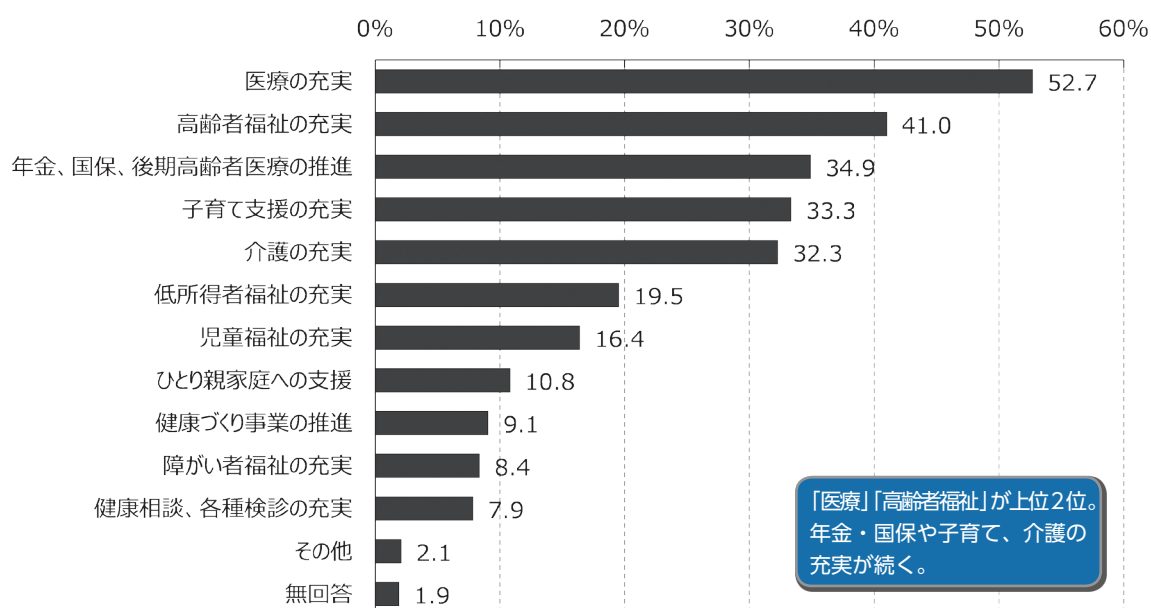
広尾町の将来に望むこと【複数回答】



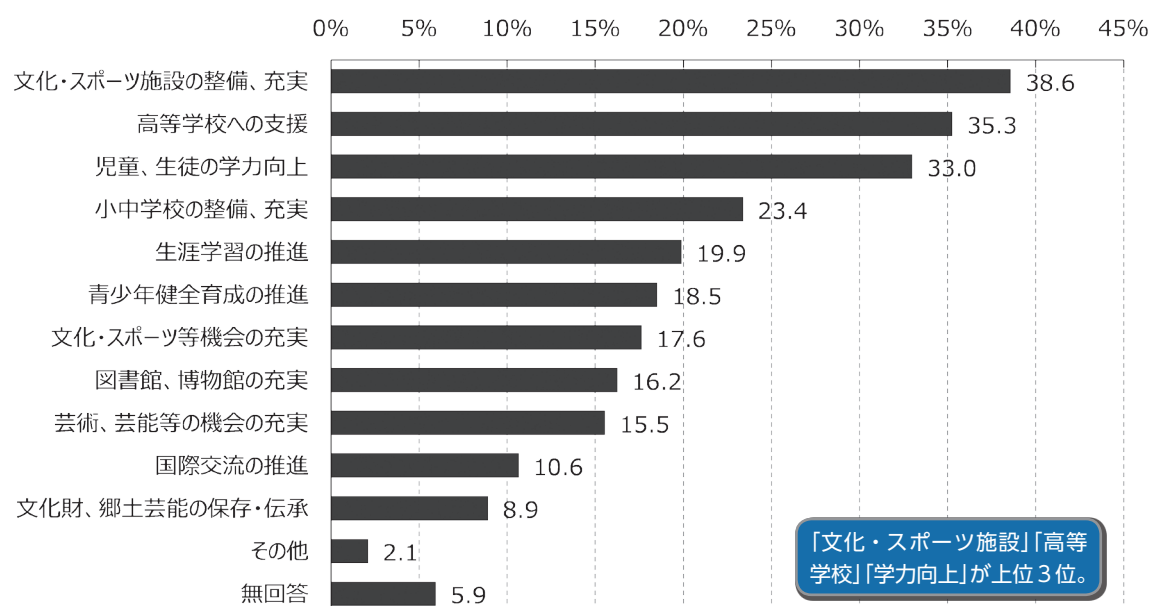
今後の「産業振興」について大切だと思うこと【複数回答】



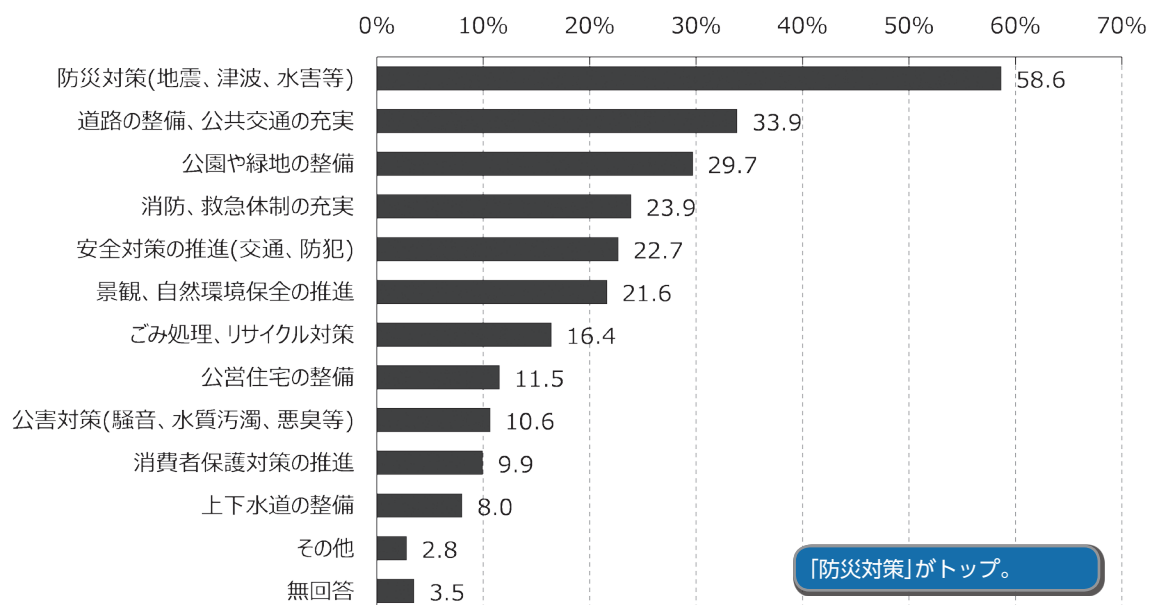
今後の「保健・福祉・医療」について大切だと思うこと【複数回答】



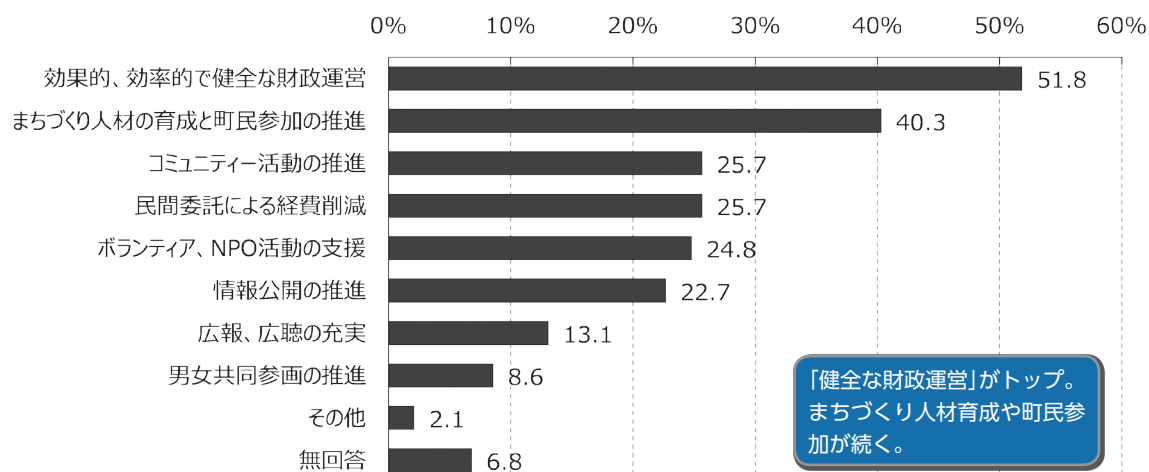
今後の「教育・文化」について大切だと思うこと【複数回答】



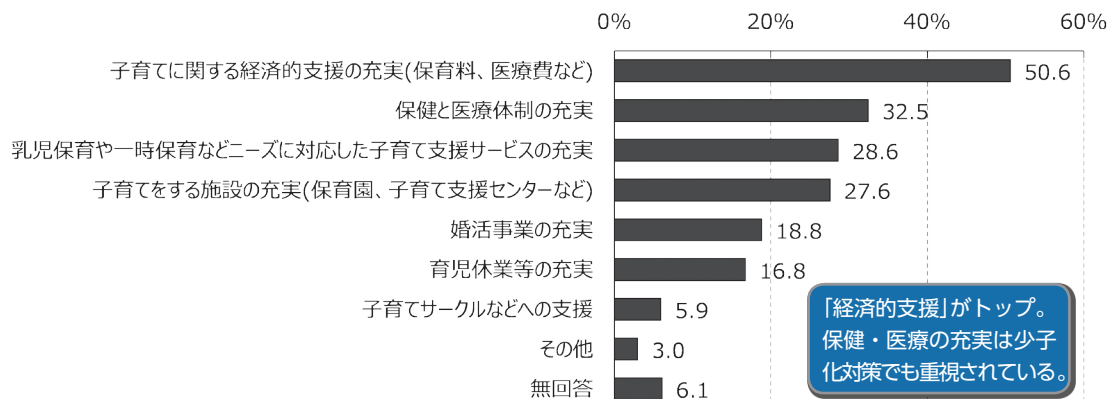
今後の「安全・安心」について大切だと思うこと【複数回答】



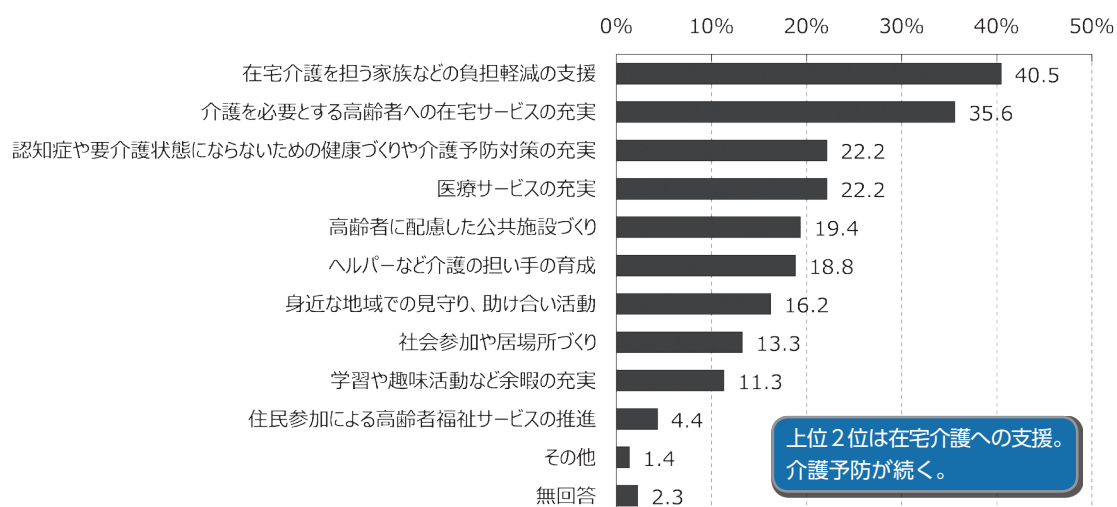
今後の「協働のまちづくり」について大切だと思うこと【複数回答】



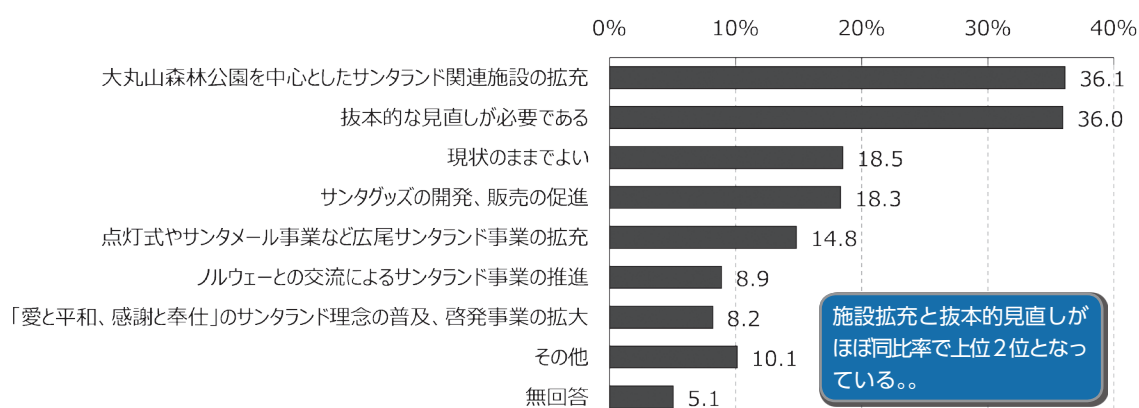
今後の「少子化対策」について大切だと思うこと【複数回答】



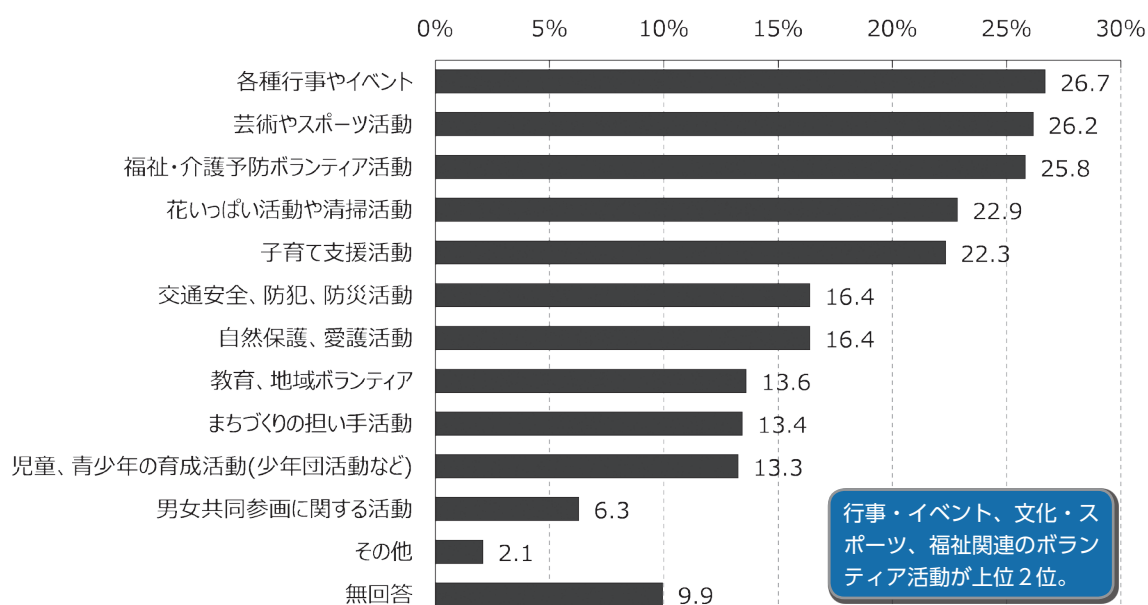
今後の「高齢社会」について大切だと思うこと【複数回答】



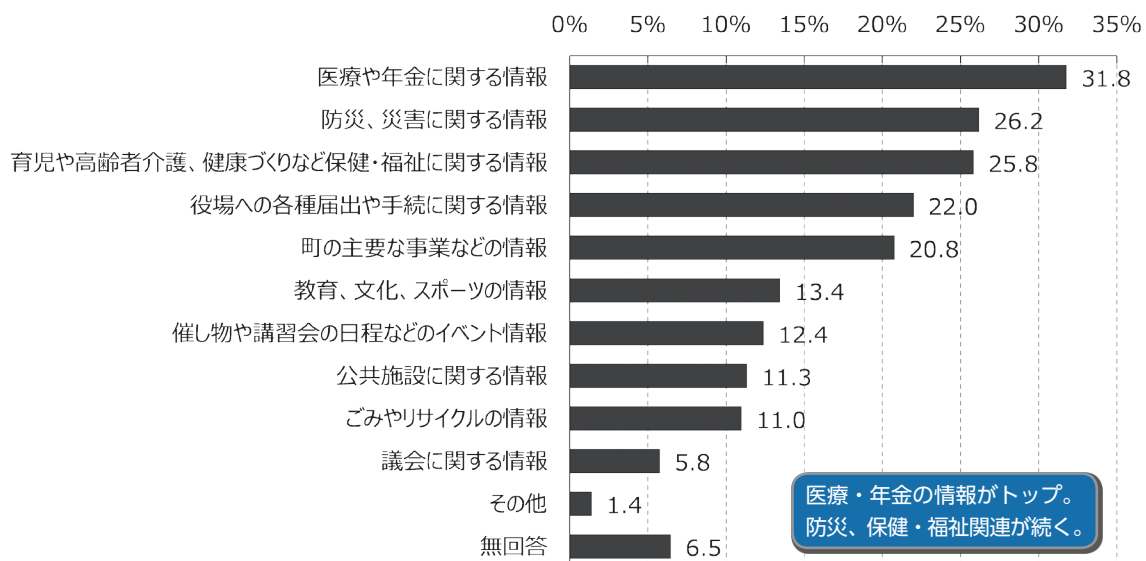
今後の「広尾サンタランドの取組」について大切だと思うこと【複数回答】



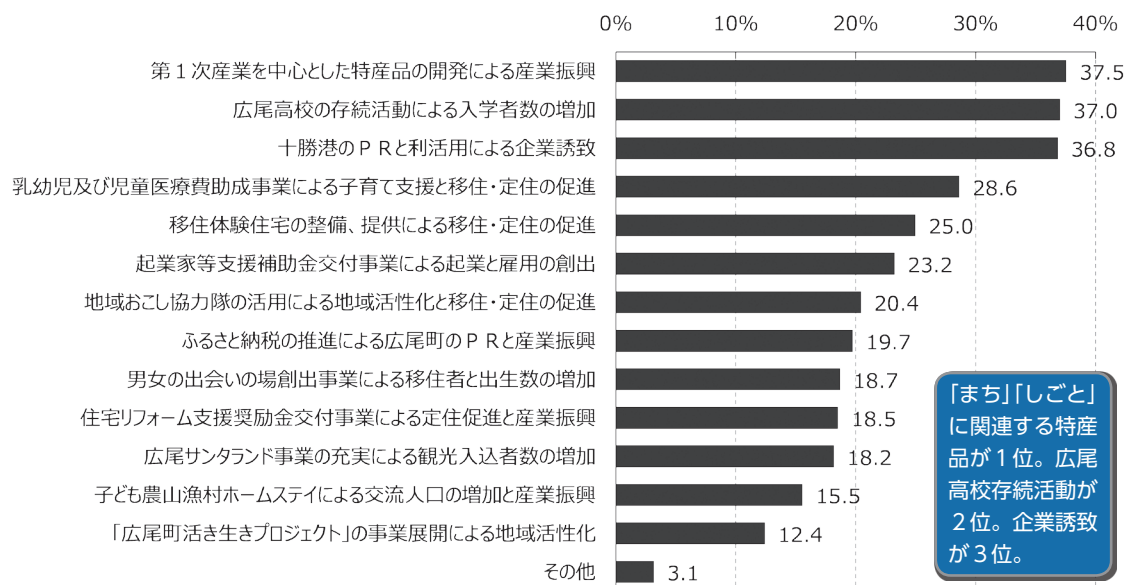
参加してみたい、大切だと思う活動【複数回答】



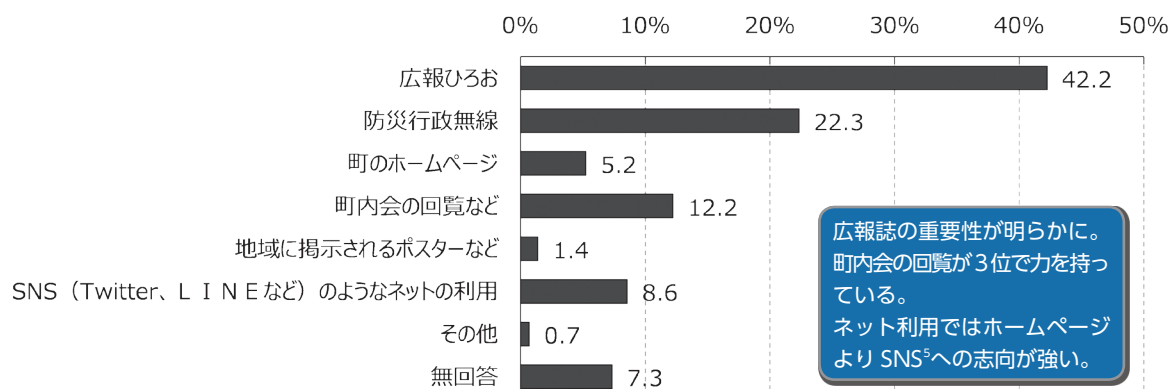
必要と思う情報について【複数回答】



地方創生に向けて、効果的であると思われる事業【複数回答】



町政や地域に関する情報を伝える方法として、重視(充実)すべきだと思うこと



3 まちづくりワークショップの概要

第6次まちづくり推進総合計画の策定作業の一環として、3つの専門部会ごとにワークショップを行いました。「日本で一番、〇〇なまちをめざす！」をテーマに、付箋紙を使ったグループワークを通じて、10年後のまちの将来像を輪になって語り合いました。

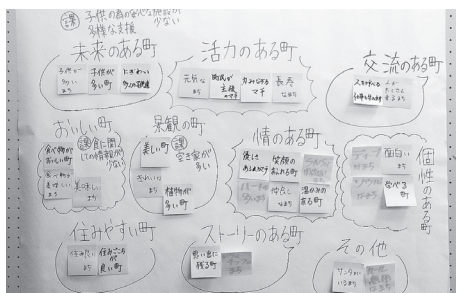
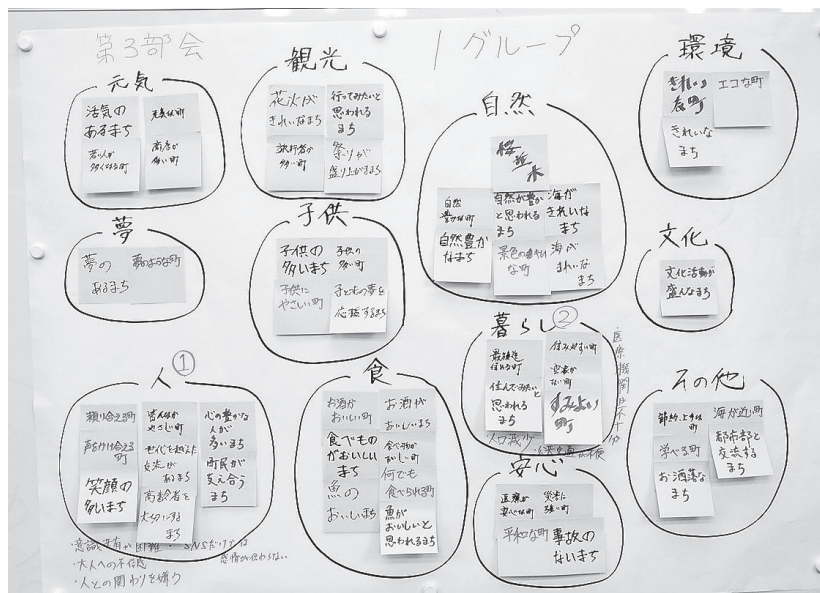
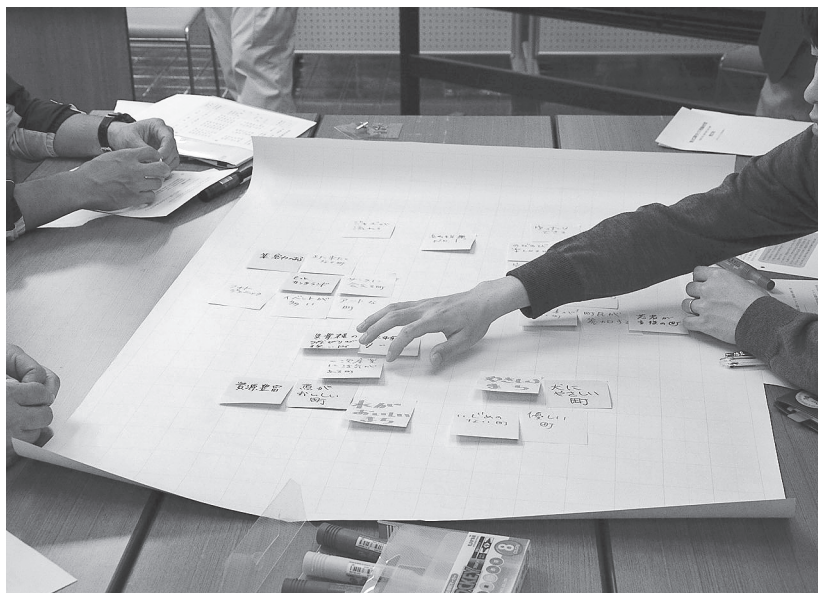
※まちづくりワークショップの結果は、広尾町公式ウェブサイトで閲覧可能。

第1回(令和元年5月15日、22日)

「日本で一番、〇〇なまちをめざす！」をテーマに、付箋紙を使ったグループワークを行いました。10年後のまちの将来像をグループごとに輪になって語り合いながら、付箋紙に記入して分野ごとに分類する作業を行いました。

第2回(令和元年6月10日)

第1回のWSで出された意見を実現するための方策について、前回と同じグループで話し合いました。最後に結果を報告し合い、共有を図りました。



まちづくりワークショップで出された、日本

カテゴリ	日本で一番、「」をめざす！	
おいしいまち グルメ・食	「海のさちがおいしいまち」 「B 級グルメがおいしいまち」	「おいしい食べ物があるまち」 「食べものがおいしいまち」
産業・豊か・活気・ 活力・元気・ 交流するまち	「『ありがとう』の多いまち」 「のびのび楽しめるまち」 「資源豊富なまち」 「イベントが多いまち」 「少なくとも若者の力が強いまち」 「牛乳を飲むまち、食べるまち」 「長寿なまち」 「元気なまち」	「工業地（労働）雇用のまち」 「異業種のつながりが強いまち」 「人を呼べる仕事を生み出すまち」 「集客力のあるまち」 「老若男女みんなが元気なまち」 「力みなぎるまち」 「若者が主役のまち」 「都市部と交流するまち」
観光のまち ストーリーのあるまち 個性のあるまち オシャレなまち	「アウトドアに行ってみたいまち」 「バックパッカーが集うまち」 「木であふれるまち」 「海が楽しいまち」 「学べるまち」 「ディープなまち」 「面白いまち」 「音楽活動がさかんなまち」	「観光が楽しみなまち」 「移住してみたいまち」 「フォトジェニックなまち」 「ジャズが流れるまち」 「お洒落なまち」 「旅行者が多いまち」 「ソウルなまち」 「花であふれるまち」
健康・福祉	「医療が安心なまち」 「ホスピタル地 病・健 のまち」 「病気になっても安心して暮らせるまち」	「長寿なまち」 「活動的な年寄りのまち」 「出生率が高いまち」
子ども	「子育てがしやすいまち」 「子供にやさしい」	「子どもが元気に育つまち」
教育・文化	「教育力があるまち」	「文化活動が盛んなまち」
安心・安全 エネルギー	「安心して人生設計ができるまち」 「治安のいいまち」 「事故のないまち」	「交通事故件数が少ないまち」 「安全なまち」 「犯罪率が低いまち」
くらし 住みやすいまち	「安心して住めるまち」 「雪が降っても除雪しなくてよいまち」 「住みよいまち」 「公衆トイレが多いまち」 「最後まで住めるまち」	「自家用車がなくても困らないまち」 「水道代が安いまち」 「買い物をしてみたいまち」 「節約上手なまち」 「町民税が安いまち」
景観・自然・環境	「空き家がないまち」 「植物が多いまち」 「桜並木のまち」	「きれいなまち」 「美しいまち」 「水が美味しいまち」
情のあるまち つながり・自主力・ 人	「集まって楽しめるまち」 「つながるまち」 「自主自立するまち」 「笑顔があふれるまち」 「みんながやさしいまち」 「町民が参加するまち」	「声をかけ合えるまち」 「犬にやさしいまち」 「ネットワークがあるまち」 「世代を超えた交流があるまち」 「近所づきあいが上手なまち」 「優しさあふれるまち」
未来のあるまち 夢のあるまち	「イルミネーションがキレイなまち」 「夢のあるまち」 「セカンドハウスのまち」 「魅力のあるまち」	「サンタを推しているまち」 「子どもが多いまち」 「わくわくするまち」

で“一番”をめざす、201の「○○なまち」

「何でも食べられるまち」 「魚がおいしいまち」	「美味しいまち」 「レストラン、食堂、バラエティがあるまち」	「お酒がおいしいまち」
「仲間づくりしやすいまち」 「幸せなまち」 「一次産業が元気なまち」 「飲食店の多いまち」 「活気のあるまち」 「若い人が多くなるまち」 「景気が良いまち」	「あいさつが元気なまち」 「平均所得が高いまち」 「死ぬまで楽しいまち」 「商店が多いまち」 「楽しいまち」 「漁港がにぎわうまち」 「特産品が多いまち」	「個人事業主の多いまち」 「移住者に優しいまち」 「盛り上がるまち」 「笑顔の多いまち」 「若い起業家の多いまち」 「横のつながりが強いまち (町内会、漁業、農業、商工会とか)」
「花火がきれいなまち」 「キャンプをしたいまち」 「インスタ映えするまち」 「祭りが盛り上がるまち」 「スローライフが楽しめるまち」 「思い出に残るまち」 「笑いの多いまち」	「アートなまち」 「人がたくさん来るまち」 「サーフィンなまち」 「美味しい食堂やカフェがあるまち」 「ゆったりできるまち」 「動物に会いやすいまち」 「おもてなしがよいまち」	「観光客が多いまち」 「行ってみたいと思われるまち」 「また来たくなるまち」 「資源活用（観光）のまち」 「オタクなまち」 「ルール無用なまち」 「ドラマチックなまち」
「福祉なまち」 「働く高齢者が多いまち」 「福祉が充実しているまち」	「お年寄りに優しいまち」 「ボランティアの多いまち」	「長生きできるまち」 「健康寿命が長いまち」
「子どもが多いまち」	「子どもがのびのびと生活できるまち」	「子どもが元気なまち」
「子どもの体力があるまち」	「子どもの夢を応援するまち」	
「心配事がないまち」 「災害に強いまち」 「お年寄りが安心して暮らせるまち」	「安心なまち」 「犯罪の少ないまち」 「将来安心して暮らせるまち」	「交通事故の少ないまち」 「エネルギー自給のまち」 「平和なまち」
「納税率 No.1 のまち」 「お年寄りが住みやすいまち」 「住んでみたいと思われるまち」 「光熱費が安いまち」 「地域と海が共存しているまち」	「海が近いまち」 「住みごこちが良いまち」 「公共施設の充実したまち」 「買い物に困らないまち (お店がある)」	「除雪が楽なまち」 「住みやすいまち」 「生活費が安いまち」
「自然豊かなまち」 「景色のきれいなまち」 「エコなまち」	「空き家の少ないまち」 「仲良しなまち」 「自然にふれあい、親しみをもてるまち」	「空気が美味しい！まち」 「海がきれいなまち」
「町民皆が役割を持つまち」 「子どもが戻ってくるまち」 「温かみのあるまち」 「皆で一つなまち」 「町民が支え合うまち」 「高齢者を大切にするまち」	「いじめのないまち」 「仲良しなまち」 「住民と一緒に考えられるまち」 「笑顔の多いまち」 「優しいまち」 「町民が主役のまち」	「心の豊かな人が多いまち」 「SNS が関係ないまち」 「ハートが多いまち」 「頼り合えるまち」 「近所の顔が見えるまち」
「もっとサンタランドのまち」 「明るいまち（イルミネーションの多い）」 「サンタが出没するまち」	「永住者が多いまち」 「夢のようなまち」 「にぎわい、多くの子ども達」	「自慢ができるまち」 「サンタがいるまち」 「サンタに会えるまち」

4 まちづくり懇談会、おしかけ座談会の概要

第6次広尾町まちづくり推進総合計画の策定作業の一環として、各分野で活躍する方や一般市民が、分野の壁を越えてまちづくりについて意見交換を行う「まちづくり懇談会」を3日間開催しました。また、サークルやグループなどの集まりの場に役場の担当職員が訪問し、まちづくりについて皆さんで語り合う「おしかけ座談会」を3回開催しました。

まちづくり懇談会チラシ



おしかけ座談会チラシ



「まちづくり懇談会」で出された意見(概要)

令和元年6月24日(月)開催 ～ テーマ「産業」「観光」～

キャンプ場を整備していけばアウトドア観光につながる。(広尾のキャンプ場は)グランピングには良いと聞いている。トイレの整備が必要。

自然はあるけれどインストラクターがいないので、広尾町に住み始めた人は体験できるまでに時間を要する。好きな人はいるが、^{つて}伝手が無いと楽しめない。

サーフィンには良い波で人が集まるのに、トイレやカフェがない。サーファーの移住を可能にするために空き家を利用できないか。

十勝管内で(中心市街地の近くに)海と山があるのは広尾町だけ。

キャンプ場+水族館+釣り+食⇒観光客。

収穫体験などを複数の農家で取り組めば、補完し合えるので相乗効果が期待できるのでは。

おもてなしや景観が、また来てみたいと思わせる魅力の一つになるのではないかな。

	水族館の復活、マツカワを見せてもよいのでは。
	地元の人が楽しむことが大切。
	広尾町を訪れる人は、その地域ならではの体験を求めてやってくる。たとえば、地引網体験や遊漁船乗船など。
観光拠点・道の駅	道の駅はトラック運転手にとって、ありがたい(休憩、トイレ、飲食)。天馬街道、釧路方面からの交通量を考えると豊似市街地が適地と思う。特産品を置ける。仕事が増える。特別なものがないと人は来ない。トラックの利便性を考えて大きい駐車場があればよい。
	シーサイドパークはロケーションとして良い。海の見えるレストランで地元の味を提供しては。
	温泉と道の駅があれば、大きな魅力となる。
	広尾で毎日鮮魚が買える直売店があれば。
	広尾に来た人が、まず、最初に行く拠点のような場所が必要であり、観光ガイド機能の工夫も必要。
	広尾町にはあまり魅力のある観光スポットがない。友達が来ても連れていく場所がない。サンタランドも1回行けばよいと思う。
	広尾町は温泉がないのが残念。広尾町民は温泉好き。大樹、忠類、浦河、三石などによく行っている。
	施設整備など色々な面において中途半端な感じがする。
	大げさな施設、取組ではなく、欲張らずにスモールスタートで、小さなアイデア、取組を徐々に拡げていく、つなげていくことが大事。
	農業と漁業の連携。魚直売の日でのサンタマルシェ出店など。ネットワークを繋げて、たとえば、農家を訪れた時に漁業の体験の情報を伝えることができれば拡がりができるのでは。
	友達が広尾町に遊びに来て、観光スポット等を案内しようとしたが、連れて行く場所がなく困った。
	えりもでも直売所、厚岸でも直売所エーウロコが人気。広尾町でもそういう常設の直売所を設置できないか。
	観光客が行きたいと思う店や場所がない。
サンタランド	(観光資源としての)サンタには、まだまだ可能性を感じる。
	サンタの家は2階からの景色が良いので飲食(軽食)できるとよい。
	サンタランドと言われてもピンとこない。
	大丸山森林公園は遊具が老朽化している。万里の長城を改修して再利用したい。公園を整備したらアクティビティに利用できる。
まちの情報発信	町のホームページの観光情報が見づらい。
	広尾のブランド、特産品などを広尾に来てから知った。情報発信に課題がある。何かに特化して売り出せれば。
	仮装盆踊りは現在の場所では地元の人しか集まらない。車両が通行する場所でやれば、人が集まりやすい。イベント周知を車両通行中に見える場所に掲示したらどうか(消防庁舎など)
	「十勝」のイメージは強いが、「広尾町」のイメージ、印象は弱い。
	広尾町を知ってもらうための周知、PRが必要である。

まちの情報発信	スマートフォンで町内の飲食店やお土産を買う店を調べても、ほとんど情報が出てこない。そのほかの観光情報なども乏しい。実際来てみると、色々と魅力的な場所はあるのだが、ほとんど知られていない。
	観光客の滞在時間を延ばすには、色々な情報をネット上にまとめて、コンテンツを繋げていくことが必要では。
	広尾町を訪れた人はお土産に何を買うのだろうか。ここに行けば揃っているというお店がないので、初めて来た人にはわかりづらい。そういった情報発信が弱いと思う。
	今あることをPR、発信すべきである。今あるもので人を呼べる。
	売っているもの、作っているもののストーリーを見せることができれば購買者の興味を引くのでは。 「北海道」、「十勝」のアドバンテージはある。
観光戦略	一つ良いものがあって、それに繋がっていく仕掛けが必要。
	観光は2次産業であり、そのために何かがあれば人は集まる。
	送った産品は好評なので、広尾に行きたいと思える工夫が必要である。(広尾でしか食べられない)
	観光客へのちょっとしたおもてなしの心。
	観光客を呼び込むには一つの市町村では限界があり、オール十勝で取り組む必要があるのでは。
特産品	「熊がに」が呼び水、入口になればよい。
	「広尾と言えば〇〇〇」というものがない。〇〇〇を食べられる店が必要。
	広尾に来てどうしても食べたいものがないとダメ。
	広尾町の食材、今あるものを提供している。情報提供もしている。
	素材は良いので、見せるプロが必要である。
	地元の味で食べてほしい。
	地場産品が強くないとダメ。継続していけることが大事。
	漁組直売の「魚の日」の販売時間が30分しかない。漁組でもどうすればよいか検討している。
	ししゃもがたくさん獲れても、町内の加工業者がさばき切れないので、多くが鵺川に行って、それがむかわブランドで売れている。広尾町は宣伝下手。
	ブランド秋サケ「広輝」は基準が厳しいため、あまり市場に出ない。だが、えりもの「銀聖」のように基準を緩くすると結果良くないので、今の厳しい基準を保つことが必要だと思う。
産業振興	マツカワを中間育成しているが水揚げは増加している。販路拡大が必要である。漁組とコラボして販路拡大してはどうか。若者に広尾の味を知ってもらう。
	ジビエは国も推奨している。都会の人が好んでいる。加工が広がらない。会社組織化したらどうか。
	近年、鮭やイカの漁獲量が減っている。イカ漁の外来船が減少すると町経済への影響が大きい。
	最近魚が獲れないので、漁期も早く終わってしまう。水温の変化もあって、獲りたい魚が獲れない状況が続いている。
	乗組員の新規参入を求める一方で、漁業資源の減少、回遊の変化など、従事者と漁獲高とのバランスも考慮しなければならない。(人を集めすぎても十分な稼ぎを提供できない) 農業では、家族経営が減少し、農村がなくなる心配がある。

産業振興	漁業は人手不足が深刻で、昆布干しの陸回りが確保できなかったり、乗組員が減り、将来的には船が動かせなかったりする恐れあり。
	兼業の仕組みを構築できれば。例えば、漁業に従事している人が、閑散期に林業に従事したり、農業に従事したり、単体の産業ではなく、複数の産業で人材を回すような取組を考えていかなければ。
	漁業も農業も働き手の確保が課題で、後継者の就農・就漁意欲が低い。仕事がきつく、かつ安定的に稼げず魅力がない。
	酪農ヘルパー、スマート農業など、労働負担の軽減を考えていかなければ。
飲食店・商店	地元で取れたものを地元で食べる場所がない。店が小さくてもよい、
	前にあった「みはる」みたいな店が今はない。
	例えば北の屋台のような長屋が連なるイメージで。
	飲食店の後継者の確保が難しく、閉店する店が続出している。
	豊似に住んでいるが、普段の買い物は大樹に行っている。距離が近いことと大樹の方が夜遅くまで開いている店が多いため。

令和元年6月25日(火)開催 ～ テーマ「子育て」「教育」～

子育て支援	認定こども園 ⁶ は、保育士不足により0歳児などで待機児童が発生している。
	家庭の変化で、認定こども園や放課後児童クラブのニーズはこれからも下がらないことが予想される。放課後児童クラブは、塾や少年団など放課後の過ごし方の多様化で、保護者のニーズと施設のサービスがずれることが予想される。多様な働き方の受け皿としては、国の制度に沿っているとそのうち限界がくる。広尾町ならではの形を模索しなければならない。
	今、豊似小学校で放課後の一時預かりの話が出ている。色々な形、ニーズの変化に対応していかなければ。
	現行の制度からはみ出る場合に、地域が主体となり、地域のパワーを生かして、地域の工夫でどう対応するか。
	前任校で元教員や元保育士が中心となり放課後の一時預かりを行っていたが、長くやっていく中で、中核の人が高齢化し、継続が課題となっている。
コミュニティ・スクール ⁸	ボランティアはまちづくりの核となるものだが、本当の意味でのボランティアが広尾町では育っていない。地縁、血縁に基づかない自発的なボランティアを育てていかなければならない。町内会も将来的に限界が来るので、機能しているうちに替わりになるネットワークを作らなければ。
	広尾っ子応援団 ⁷ は、既存の団体を活用しつつ、それらの枠組みに縛られない仕組みを構築しようとしている。
	広尾っ子応援団には、現在57名が登録しており、広尾町にも本物のボランティアが育つ可能性を感じている。

学校に関わってみたい人が多くいる。人と人が繋がっていくと色々なことを続けていくことができる。

認定こども園は、今まで少なかった研修の機会を確保して、小学校入学までに身に付けたい10の力を身に付けることができるよう取り組んでいる。

少年団の指導者も代替わりしていく。

先生方は、中堅が多い。子ども達の10年先、20年先を見通しているわけではなく、今の子ども達をどう育てるかで精いっぱい。

広尾高校では、町内企業の合同説明会を実施しており、今年で3回目を迎えた。説明会は進学希望の子も含む全学年が参加する。最近、町内に就職する人が増えてきた。町内に魅力的な働き口があれば高校生に対してもっとPRしてほしい。

広尾町で進学、就職することの良さや希望を企業や産業の人が子ども達にもっと語れるようにならなければ。

企業が高校生にその仕事の魅力を語るときに、就職後の育成方針やキャリアアップの部分もアピールすると良いのでは。大学進学希望者も将来的には広尾町に戻ってくるかもしれないという考えも必要。大企業だけでなく、小さな事業所も含めてビジョンの繋がりが必要。

今の広尾中の生徒は、素直で、何でも包み隠さず話す印象。悪気が無くトラブルに発展する場合もあり。思春期になると段々口数が減る。

広尾中の卒業生57名中、約6割の38名が広尾高校に進学する。大樹高校は地元からの入学が約4割、残りが他のまちの7校から入学する。

高校を選択する中学生に対し、広尾高校に入るとどういう姿で卒業できるかを大人達が語ることができるかどうか。

広尾高校に進学しても、努力すれば国公立大学に行ける。せっかく中高一貫に取り組んでいても町外に流出してしまうのはもったいない。帯広の進学校との教科書の違いなどをどのようにフォローしていけるか。

保護者の意識も変えないとならない。

今年、中学生が東京へ修学旅行に行ったので、そのまとめの中で、東京を見てきた目で、都会である東京と田舎である広尾町を比較し、広尾のまちをどのようにしたいかを考える機会としたい。

将来目指す職業に応じた進路指導を行うべき。

教科書を学ぶのではなく、教科書で学ぶということ。目標を持たせ、自発的な努力を引き出すことができれば。教科書の違いはそれほど関係ない。

まちづくりワークショップで、「目立ちたくない風潮」という分析があったが、それはまさに自己肯定感の低さを表しているのでは。親などの大人が、子どもがやってきたことを認めてほしい。

中学生は自己肯定感が低く、授業であまり手を挙げない。

広尾の子どもを見ると、広尾のことをあまり好きではないように感じる。

広尾のことを好きでないのは、まちづくりに関わっている意識が無く、お客さんであり傍観者である。ほんの一部でも自分の思いを実現できる体験をすると、まちの好きな部分が増えて広尾への愛着が増し、住みたいまち、好きなまちになっていくのでは。

令和元年6月26日(水)開催 ～ テーマ「防災・生活環境」「人づくり・地域づくり」～

防災(災害対策、自主防災、災害ボランティア)

防災グッズを用意している。でも、いざとなったら慌てて持たないで逃げてしまうのではないかと心配している。車の中にも長靴やスコップを積んである。

しばらく大きな地震が来ていないので、町民の備蓄の意識が低い。

大地震が来るという予測もあり、日ごろから備えることが大切だと思う。去年の停電の後、カセットガスで動くストーブを買った。

2～3年前から家で備蓄をしていて、町の避難訓練の際は持っていくようにしている。ただ、他の人でそういったことをしている人が少ないと感じている。

津波30mは、街中のどこまで来るのだろう。普段から逃げる道を考えておく。車の駐車向きを意識して停める。

避難場所、避難所で町内会ごとの旗を用意してほしい。

避難訓練の時に、町内会ごとに集まるため、目印となる町内会名が書かれた旗が必要では。

自主防災組織を設立すると、町から活動助成金がもらえるので、それを活用して一部の自主防災組織では旗を作っているようだ。

避難訓練で、赤十字奉仕団が炊き出しの協力をしているが、実際に災害が起きた場合、どういう連絡体制になるのか。町の対策本部からの連絡を待てばいいのか、こちらから連絡すればいいのか、わからない。日赤側から災害対策本部には電話しづらい。

実施の災害の際は、炊き出しをお願いする場合も、お願いしない場合も対策本部から赤十字奉仕団に必ず連絡し、情報共有を図るべき。

冬の避難が心配。屋外の避難場所に集まってから、建物の避難所に移動するまでの待ち時間が長い時に寒さをどのようにしのげばよいのか。

旧広尾小学校グラウンドが緊急避難場所になっているが、冬はどうしたらよいのか。

去年のブラックアウトでは情報がほとんど入ってこなかったもので、ラジオを買った家はあるのでは。

自主防災組織は必要なものだと思う。だけどどうやって組織を作るかがよくわからない。組織がなくても、町内会で隣近所を見守ることができていればよいのだが。

公共交通・交通安全・道路交通

移動手段として車は必要である。田舎ほど公共交通が不便。コミバスの運行を考えてほしい。

十勝バスを利用するが、トイレがないのが不便。忠類に1度停まるが、足りない。

今は自動車を運転できているが、将来運転できなくなったときにバスが必要である。

サンタ号はとても便利なので、無くならないでほしい。

サンタ号は、ドライバー不足で廃止の話が出たことがある。当面は継続されるが将来的には不安がある。

今後、車を運転できなくなったらバスを利用するしかない。しかし、病院に行くバスはあるが、買い物とかに行くための交通手段がない。十勝バスも路線バスとして運行しているが、浜(海岸地域)にまでは来ない。

バスの問題は、これからしっかり考えていく必要がある。

バス待合所の営業時間が変わってしまい、すごく不便になった。

免許を返納すると買物等が不便になる。町内をくまなく回るコミュニティバスがあれば便利だと思う。

	視覚に不安がある人は、音の出る信号機の設置を望んでいる。
	運転中、自転車に乗っている高齢者が怖い。
	高規格道路の早期開通は色々な面でメリットがある。
街並み・景観・公園緑地	国道の草がきちんと管理できておらず危ないところ(シーサイドに行く曲り角等)がある。見た目も悪い。もし管理できないなら埋めてしまえばいいのでは。
	レストハウスを壊してほしい。
	「サンタの丘」を色合いよく整備してほしい。
	ウォーキングで大丸山森林公園によく行くが、立派な藤棚があり、きちんと手を加えたらもっときれいに咲くのでは。管理に係る手間や費用が大変なのであれば、ボランティアを募るなど、工夫する余地があるのでは。
	つつじまつりへの出店で、大丸山森林公園に行ったが、吊り橋が渡れなくなっていた。町で補修する予定はないのか。
医療・介護	まちを歩くことで気づくことがたくさんある。シーサイドパーク内の博物館の前の芝生に行くと、犬の糞が落ちている。また、車通りの少ない道端に袋に入ったごみが落ちているのを見かける。
	町立病院の診療科目が充実し、込み合っているようだ。特に整形外科が好評で、ウォーターベッドを試してきたがとてもよかった。最近3台に増えたので、待ち時間も短くなった。
高齢者活躍・世代間交流	介護保険のヘルパーさんを利用している人は、ヘルパーさんに頼ることが多くなって、周りの人との関係が希薄になってきていると個人的に感じる。
	元気な高齢者を活用してまちづくりを考えてみてはどうか。高齢者が生き生きとした社会にしたい。高齢者は時間・知恵・小銭を持っている。これを活用すべき。
	少子高齢化と言われていて、高齢化が悪い言葉のように感じてしまうが決して悪いことではないと思う。高齢者が増えていくという現実の中で、自分たちで10年後どう生きていくのか考えるのが大事。たとえば、ひろお未来塾の活動を支えていく、学校に協力するなど、高齢者が行政に頼らず生きがいを見つけていくことが必要になるのではないかな。そういった活動の場づくりが民間主導であるといい。
	子どもと高齢者が食事で交流できる。世代間交流のメリットが期待できる。子供から癒しをもらえる。
町内会・ボランティア	いきいき百歳体操 ⁹ に参加しているが、色々な年代の人が集って、世代間交流が図られている。
	町内会が高齢化し、役員の成り手や葬儀の手伝いに支障がでる心配がある。
	町内会の入り方がわからなかったので入っていない。転入手続きの際に教えてくれるなど、きっかけがあったら入っていたかもしれない。転入手続きの際に説明をしてみたらどうか。
	ボランティアのメンバーの高齢化が進み、新会員の確保が課題。役場職員など現役で働く年代へのPRが必要。
	自分たちのボランティアグループと関わりのある高校生ボランティアグループの1名の生徒が高校卒業後、町内に就職して自分たちのグループに加入してくれた。
	ボランティアの担い手が高齢化している。もっと若い人が入ってほしい。役場職員ももっとボランティア活動に参加するべきだ。
	何でも「町民」、「ボランティア」に頼る傾向があると感じる。もっと職員はがんばるべきだ。

その他

【空き家対策】高齢者が施設入所していくと空き家が増えるので、活用方法を考えてほしい。移住者へ提供できないか。

【道の駅】もし、道の駅をつくるのであれば、町外からの人が集まるだけでなく、町民も集えるような場所になれば。

【アウトドア観光】サーファーは1年通じて訪れるので、経済効果が期待できる。

【漁業】漁の変化が顕著で、特にイカが獲れない。漁業者も水産加工業者もかなりのダメージがある。

【廃棄物処理】広尾のごみの分別は細かくて厳しいと感じた。

【廃棄物処理】ごみの分別ができていない。子どものうちからごみの出し方を教えるのもいいのではないかと。役場の出前授業で教えるのも良いのでは。

【ふるさと納税】ふるさと納税の返礼品でお墓の見守りサービスがあることを初めて知った。もっとPRするべきでは。

【イベント】つつじまつりで広尾小学校と会場を結ぶバスが出るようになり便利になったが、乗降場と駐車場まで距離があるので、何か改善等できないか。また、そういったことに関する周知が足りないと感じる。防災無線でも聞き逃すことがあるので、もっと頻繁に流すべきだ。

【公共施設】庁舎玄関前の段差をわかり易く色を付けてほしい。

「おしかけ座談会」で出された意見(概要)

令和元年7月5日(金)開催 豊似老人クラブ12名(会場：豊似寿の家)

子ども達を寿の家に集めて(または老人クラブが学校に出向いて)、子ども達に昔の話を聞かせる「語りべ」の取り組みを検討している。

定時放送でまちなかサロンの案内が流れているが、移動手段がないと参加を躊躇してしまう。十勝バスは普段あまり乗らないが、将来自動車の運転が難しくなったときのことを考えると無くなったら困る。

避難所の場所は知っているが、具体的にどのように行動するかは、訓練もやっていないので、わからない。

令和元年7月17日(水)開催 民生委員児童委員協議会16名(会場：コミセン大ホール)

若い人がどんどん減って、高齢者ばかりが多くなると、まちの活気がなくなってしまう心配がある。

町内の商店はシャッターを降ろした店が多く、まちを活性化させて若者が将来に希望を持てるようなまちづくりをすべき。

大手会社が参入してしまうと、個人事業者がコツコツと頑張っている競争力が無いので敵わない。地元の商業を守り、親が築いたものを若い後継者に引き継ぐことができるような取組ができないか。

大手会社が参入したとしても、地元の人が多く雇用されるシステムを作るべき。

町がソーラーパネルを設置して発電事業を行い、町民に安価な電気を供給し、その安くなったお金を地元の商店での買い物に使うようなシステムが作れないか。

これからできることは限られていると思うので、行政改革の取組内容も踏まえて、現実に合わせて計画を作成すべき。

今までわたしたちは町にお願いするばかりで、自分でできることも自分で何とかするという意識が少なかった。これからは、高齢者も体が元気なうちは自分たちでまちを盛り立てていく気持ちで頑張っていきたい。

令和元年10月7日(月)開催 広尾中学校3学年60名(会場：広尾中学校武道場)

生徒：説明資料にあった「絵に描いた餅」とはどういう意味か。

職員：計画を作っても事業を盛り込んでも、実現しなければ意味がないということ。絵に描いた餅は食べることができないので、昔の言葉でそういう風に表した。

生徒：10年後のめざす姿にある「もっとサンタランドのまち」とはどういう意味か。

職員：サンタランドの取組を行っているが、サンタメールの発送通数も減少してきて、町民のサンタランドに対する熱が冷めている。もう一度サンタランドを町民が一体となって盛り上げたいという意味。

生徒：旧広尾小学校の校舎を何かに使えないか。

職員：3階建ての校舎は耐震性が無いので役場の書類を保管するなど、物置として使用している。体育館も同様。2階建ての校舎は耐震性があるので、陶芸サークルの活動場所などに使用しているが、建物が古いので、これ以上積極的に使用する考えはない。

(生徒全体への質問)

職員：10年後、みなさんが24歳か25歳になった時、広尾町に住み続けていると思う人→(挙手)生徒2～3人

職員：イクラの作り方や魚のさばき方が分かる人→(挙手)生徒4～5人

5 町政懇談会、産業・経済・福祉・教育団体等との懇談会の概要

「町民の参加と協働のまちづくり」を進めるため、町民と町長が直接対話し、まちづくりの課題などを共有することを目的に「町政懇談会」を毎年開いています。令和元年度は10月から11月にかけて「第6次広尾町まちづくり推進総合計画」「ごみ処理手数料の改正」をテーマに3日間5会場で開催し、41人の参加者から多くのご意見をいただきました。

さらに、町内の産業・経済・福祉・教育などの団体と町が今後のまちづくりについて話し合う懇談会を開催しました。広尾漁協、広尾町農協、広尾町森林組合、広尾町商工会、広尾町観光協会、広尾町社協、ゆうゆう舎、町内会連合会、校長会、広尾町文化協会、豊似文化協会、体育連盟の12団体の職員や代表者と職員がそれぞれ懇談を行いました。

「町政懇談会」で出された主な意見(概要)

令和元年10月25日(金)開催 音調津地区10名(会場：音調津総合センター)

住民：新聞報道等で公立病院再編・統合の対象として国保病院が公表されているが、具体的にどうということなのか説明してほしい。国保病院は無くなるということなのか。

町の説明：数年前から十勝管内の医療機関などで構成する十勝地域医療構想調整会議において、十勝全体の病床再編について協議している。今回の国の発表は、公立病院から先行して再編議論を加速させるねらいがある。国の発表前に、町では、病院をなくさないために国保病院を地方独立行政法人とし、48床ある急性期の病床の見直しを行っている。今回の発表は2017年のデータを元にしており、現状を反映していないとして町は反対の姿勢を示している。町として、これ以上の再編や統合、廃止といったことは考えていないが、病床のあり方については今後も議論していく。

令和元年10月31日(木)開催 野塚地区9名(会場：野塚公民館)

住民：大丸山森林公園は坂道が多く高齢者が散歩することは難しい。シーサイドの空き地に公園を整備することはできないか。安心して散歩できるような大きい公園が1つあると良い。

住民：アンケートの結果で、教育環境の満足度が低い、なぜか。

町の説明：広尾には、経験の少ない若い先生が多く赴任するので、保護者から見ると不安に感じるのでは。

令和元年10月31日(木)開催 市街地区10名(会場：老人福祉センター)

住民：中学3年生で10年後に広尾町に残りたいと思っている人が、60人中2～3人だったという話だが、どうしたら広尾に残るのかという話にはならなかったのか。

町の説明：その場でそういう話はしなかったが、中学生が主体的にまちづくりに関わることで、まちへの愛着がわくのではないかと考えている。中学生が総合学習でまちづくりについて勉強しているので、そういう取組を通じてまちへの関心を持ってもらえれば。

住民：進学などで町を離れる子どもも多い。広尾高校を卒業して就職しようと思っても、地元で働くところがないのでは。

町の説明：町内に魅力のある仕事があれば、進学などで一度まちを離れた人も戻ってくる可能性がある。計画の中にも起業支援、雇用対策という項目で対策を検討している。

住民：起業家等支援事業補助金の要綱が改正され、保証人が必須となり、使いづらくなったとの声がある。
町の説明：起業を促したい考えがある一方、町民の税金を使う以上、きちんとしてほしいという町民からの厳しい意見もある。今後、みなさんの意見を伺いながら、より実効性のある制度としたい。

令和元年11月1日(木)開催 豊似地区6名(会場：農村環境改善センター)

住民：以前、広尾町に「道の駅」をつくる話があったと思うが、その後どうなったのか。

町の説明：6～7年前に商工会が主体となり、町へ「道の駅構想」の提案があった。具体的には進んでいないが、高規格道路の広尾市街までの延伸が事業化され、ルートが決まり、インターチェンジの場所が決まれば、具体的な検討を進めていきたいと考えている。

住民：豊似市街はバスが通っているが、自宅からバス停までが遠い。買い物は、日用品などを市街でまとめ買いすることが多い。多少価格は高くても地元で買えるものはなるべく地元の商店で買いたいと思う。

令和元年11月1日(木)開催 市街地区6名(会場：丸山寿の家)

住民：第4次まちづくり計画の時は全町民にアンケートを行い、5割強が回収された。今回は抽出調査であり、回答率も41%で、町民の声を拾うには少し不足しているのではないかと。また、10年後の目指す姿が非常に抽象的ではないか。アンケート調査の内容は具体的なのに、計画のめざす姿は抽象的で具体性に欠けている。もっと具体的な内容を提示した方がよいのでは。

町の説明：アンケートの自由記述の回答が多かったことから、そこから課題を抽出して委員会で話し合った。そこではめざす姿と手段を混同しないように注意している。めざす姿を実現するために具体的にどのような方法を取るかを計画に記載する方針。

「産業・経済・福祉・教育団体等との懇談会」で出された意見(概要)

令和2年6月22日(月)開催 広尾町校長会3名(会場：コミセン第1会議室)

○子どもたちの話によると、町内に気軽に集まって話をしたり、楽しんだりする場が欲しいと思っている。一方で、子どもだけで集まる場であれば問題もあるので、悩みの相談に乗るなど、多世代の町民が集まって交流を図る場として空き家や空き店舗を活用すれば有意義ではないか。

○自己肯定感を高めるためには、地域との関わりが重要であり、心の成長にも繋がる。

○中学生はインターンシップ¹⁰や職業調べなどを通じて働くイメージを持つと思われるが、まだまだ自分事にはなっていない。例えば、起業の視点を入れて、水産物を育て、商品化して販売するまでを経験するような取組ができないか。

○豊似では、農家の子どもであれば日常的に農作業に触れ、自然に後を継ぐことを考える流れができています。

○中学生を公園に引っ張り出すには、ゲームやスマホを上回る魅力を公園に備える必要がある。そして、長く利用し続けるためには、利用するたびに新たに発見する喜び、多世代と繋がる喜びを感じさせることが必要ではないか。

○中学校で実施しているオオバナノエンレイソウ¹¹の環境学習を小学校から高校まで連携して取り組むことができないか。例えば、小学生の時に種をまき、高校生の時に開花することになれば、一貫して学ぶことができるのでは。

令和2年6月24日(水)開催 広尾漁業協同組合4名(会場：広尾漁協事務所)

- 道の駅をまちの活性化のためと捉える人と、利益が出なければやらないと捉える人とそれぞれ存在しており、実現には難しい面が多くあるのでは。
- 広尾の食資源をせっかくブランド化しても食べることができる食堂などが段々無くなってきている。
- 大樹町の飲食店と比較しても広尾町は後継者が無く閉店するケースが多く、新しく開業する飲食店も少ない。宴会なども減ってきており、まちの経済がどんどん萎んでしまっている。
- 「産業分野など各分野における求人情報を把握し、一元化を図る。」とあるが、例えば関係機関の担当者を集めて協議会などを組織し、町内のあらゆる求人情報(産業、商工業)を一元化して町民に周知する取組を行ってはどうか。広尾町出身で一度町外に転出した人が町に戻って働きたいと思った場合に、実家の親などがチラシを見てUターンに繋がることもあるのでは。

令和2年6月29日(月)開催 広尾町体育連盟3名(会場：コミセン第1会議室)

- 「賑わいと健康」創出プロジェクトは、自然体験をさせる内容となっているが、アサリ掘りなどの磯遊びが禁止されていたり、山菜採りでは個人の土地に侵入することのトラブルも発生していたりするので、漁業権など規制の面や地主との権利関係をクリアしないと実現が難しいのでは。
- スポーツ競技では、以前は部活動終りに子ども達に残ってもらって社会人と一緒に練習することがあったが、今は学校の方針で部活動の延長とみなされ帰らなければならず、一緒に練習する機会が少ない。
- 小学生の高学年になってから新たにスポーツに取り組む子はほとんどいない。できるだけ小さい頃にやり始めることが重要である。
- 広尾のキャンプ場は海や川が近く、虫も少ないので人気がある。施設が老朽化しているというが、管理する教育委員会だけの責任ではなく、町もしっかりと整備するための予算を付けるべき。

令和2年6月30日(火)開催 広尾町文化協会2名(会場：コミセン第2会議室)

- 大樹町の生涯学習センターの担当課長と話したことがあるが、大樹町としては町民だけでは利用が少ないので、ぜひ広尾町民にも使ってほしいという話であった。大樹までとなると移動が大変な面もあるし、芸能発表の会場として使用する場合は、観客をバスなどで大樹まで連れて行く必要もあるかと思う。

令和2年7月2日(木)開催 広尾町商工会3名(会場：コミセン第2会議室)

- 「観光・サンタランドの振興」の目標達成のための具体的な方法の中に、南十勝夢街道が行うシーニック・バイウェイの取組(スタンプラリーやフォトコンテストなど)を盛り込んでどうか。
- 閉店してしばらく未使用であった空き店舗の物件を再利用するのは難しい。水回りなど設備が傷んでしまう。お金をかけて改修する価値があるかどうかを見極めなければならない。
- 商工業の人材育成を長期的な視点で考えると、他地域の例で小学生を対象とした仕事体験「ベンチャーキッズプロジェクト」など、小学生が実際に物を売ってお金を得て商売の体験をする取組が有効では。

令和2年7月3日(金)開催 ゆうゆう舎2名(会場：ゆうゆう舎事務所)

- 若い人がもっとまちづくりの活動を活発にすることが大事。消極的に見えるので、新しいことを発想して、もっと外に飛び出して挑戦してほしい。以前は異業種の繋がりが今よりもあった。
- ゆうゆう舎への通所から一般就労に繋がることは少ない。精神障がい者であれば回復をめざしながら一般就労が実現した例もある。障がい者の一般就労を進めるには、職場と生活の場所をセットで提供することが大事。養護学校では就労を支援するサービス(ジョブコーチ)を行っている。大企業では障がい者を積極的に雇用する流れができています。障がい者雇用を進めるには、企業の理解を深める必要があり、マッチングの手法を学びながら進めていければ。

令和2年7月3日(金)開催 広尾町社会福祉協議会4名(会場：社協事務所)

- 空き家再生プロジェクトにある、週末だけの飲食店はボランティア団体からも要望があるのでぜひ進めてほしい。ちょっとした調理スペースがある常設の拠点施設が必要である。誰もが気軽に遊びに行くことができる場所、集まることのできる場所が求められている。
- 高齢者勤労事業部は平均年齢が高い。60代のアクティブシニアは一般就労のニーズが高く、高齢者勤労事業部にはほとんど入ってこない。
- 地域福祉を担う人材の育成について、既存のインターンシップなどでは魅力が伝わりきらないので、実際に仕事を体験できる機会をもっと増やす必要があるのでは。
- ボランティアは高齢化やマンネリ化が進んでいる。例えば初級から中級・上級へとステップアップしていく方式で研修を行うことで、リーダー格となる人材を育てることができるのでは。
- 老人クラブは会員増強運動を行っているが、他にもサロンがあったり、就労していたりなど、高齢者の暮らしも多様化しており、老人クラブが段々成り立たなくなっている。元気な高齢者は自分を老人とは思っていない。
- 交流の考え方の主流は多世代共生型なので、高齢者が子育て中の親に一方的に育児などを教えるイメージではなく、例えば若い世代が高齢者にスマートフォンの操作を教えるなど、相互に教え合う交流としてはどうか。

令和2年7月3日(金)開催 豊似文化協会1名(会場：コミセン第1会議室)

- 豊似文化協会の文化祭は5～6人が中心となって実行委員会のような形で行っている。豊似小の先生にも協力してもらっていて、地域ぐるみで自由に行っている。
- 町の文化財については、色々な機会を通じて目や耳に触れやすく、とっつきやすいものにしてほしい。

令和2年7月6日(月)開催 広尾町農業協同組合4名(会場：農村環境改善センター)

- せっかく海があるまちなので、十勝港のフェリーターミナルを道の駅にすると、駐車場の要件もクリアするし、他の地域とは違った特色をだせるのでは。
- 広尾町の農業全体を考えると、担い手の確保が重点課題である。生産物を消費者の口に直接届けるという取組は大事であると認識はしているが、持続可能な生産基盤の確立を優先すると、なかなか第6次産業¹²化まで意識が向かず、農協として主体的に第6次産業化を推進する考えには至っていない。ただし、個々の農家で取り組むことを否定するものではない。
- 広尾町には林間体験施設が無い。案として、農村環境改善センターを宿泊できる形に改修(じゅうたん敷き、網戸、シャワーの設置など)し、農家で体験した子どもたちや大学生が宿泊できるようにしてはどうか。農家では体験の受け入れは可能だが宿泊させるのが難しいという家もある。

令和2年7月7日(火)開催 広尾町観光協会3名(会場：コミセン大ホール)

- 道の駅は、今後延伸が期待される高規格道路の入り口がどの場所になるのかによって候補地の考え方も変わってくる。過去の検討は管理運営の面で合意できずに頓挫している。南十勝のはずれまで果たして人が来てくれるのか。そこに行きたいと思ってもらえる魅力があるのか。広尾には何があるの、と聞かれて胸を張ってこれと言えるものがあるのか。出店業者が「採算が合わない」からと抜けていくと成り立たない。前期5年で実現させるのは難しいのでは。前期5年は意識改革をして準備の期間として、後期で創ることを考えては。若い人が根付いてもらえるようなまちにするためには、みんなが意識を変えていかなければならない。

- 体験型観光は、ガイドの育成が課題である。本格的なアウトドアは色々な規制やリスクがあるので、比較的軽いものから始めてはどうか。体験型観光を成り立たせるには、都会のユーザーのニーズを拾う必要があり、例えばアウトドア会社と連携するなど、外部人材を活用しなければ厳しいのでは。
- 何をやるにしても行政主体ではだめで、これからは民間主体型で、行政は民間ができない部分をお手伝いする関係性が大事では。
- 空き家が増えて、商店街の中にも危機感がある。一昨年150年記念事業で、高校生から「広尾町は魅力のないまち」と言われて心に刺さっている。他のまちでは、ボルドリングやレンタル自転車など空き物件を活用した取組が見られる。広尾町でもお金をかけないでみんなで交替しながら何かの取組ができれば。まちに元気が無いと若い人にそっぽを向かれる。
- コロナの影響で、イベントなど町外から人を呼び込む活動がストップしてしまったが、これを準備期間と捉えて、何度でも来てもらえる町にするための体制づくりを進めていきたい。
- 「広尾のおいしい水」のペットボトルを使っただの商品化はなかなか難しいので、例えばウォーターサーバーなど、手軽に提供できる方法もあるのでは。
- 町外から来る人にとって公衆無線LAN環境¹³は重要である。インバウンドなど海外から来る人たちは、無線環境のある場所に集まっている。今年、コロナの影響でリモートワーク化が進んだので、インターネット環境の整備を進めて、仕事をしている人が移住しやすい環境づくりを行うべきでは。

令和2年7月8日(水)開催 広尾町町内会連合会11名(会場：コミセン大ホール)

- 防災リーダーを育成するということだが、自分達の町内会は高齢化が進んで若い人が少なくなっている状況の中で、自分達が避難することで精一杯であり、他の人たちの避難を支援する余裕はない。災害発生時は各地域に防災の専門性を有した役場職員を配置してもらいたい。この年齢になってリーダーとしてみんなの避難を手助けすることは難しい。
- 災害時の町内会の役割として、何をすべきか。高齢化が進んでいるからすべて役場で対応してくれではなく、互助の精神で我々も考えるべき。

令和2年7月16日(木)開催 広尾町森林組合3名(会場：森林組合事務所)

- 道の駅の建物の建材に地元の木材を使ってもらうことができれば地材地消となる。また、子どもの遊び場スペースを設けるのであれば木のおもちゃを木育の一環で使ってもらえるのでは。
- 子どもの遊び場を創るのであれば、市街地が良いのではないか。今は買い物のための市街地に行くが、子どもの遊び場があれば色々な用事で中心市街地に行くことが増える。
- 森づくり事業への参加者数を5年後に20名にする目標だが、例えばここに学生をターゲットとした木育事業、学校林の整備などを含むことを考えては。
- 広尾でも林業従事者の高齢化が進んでいる。担い手の確保に努めるなかで、少しずつ若い人が林業に目を向け始めていると感じている。
- 現在、子育て中であるが、町内に子どもの遊び場が足りない。いつも同じ公園にばかり行っている。
- 例えば、本通公園を裏の八十八か所と繋げて広く整備すると、眺めも良くいい公園になるのでは。

6 計画策定経過一覧

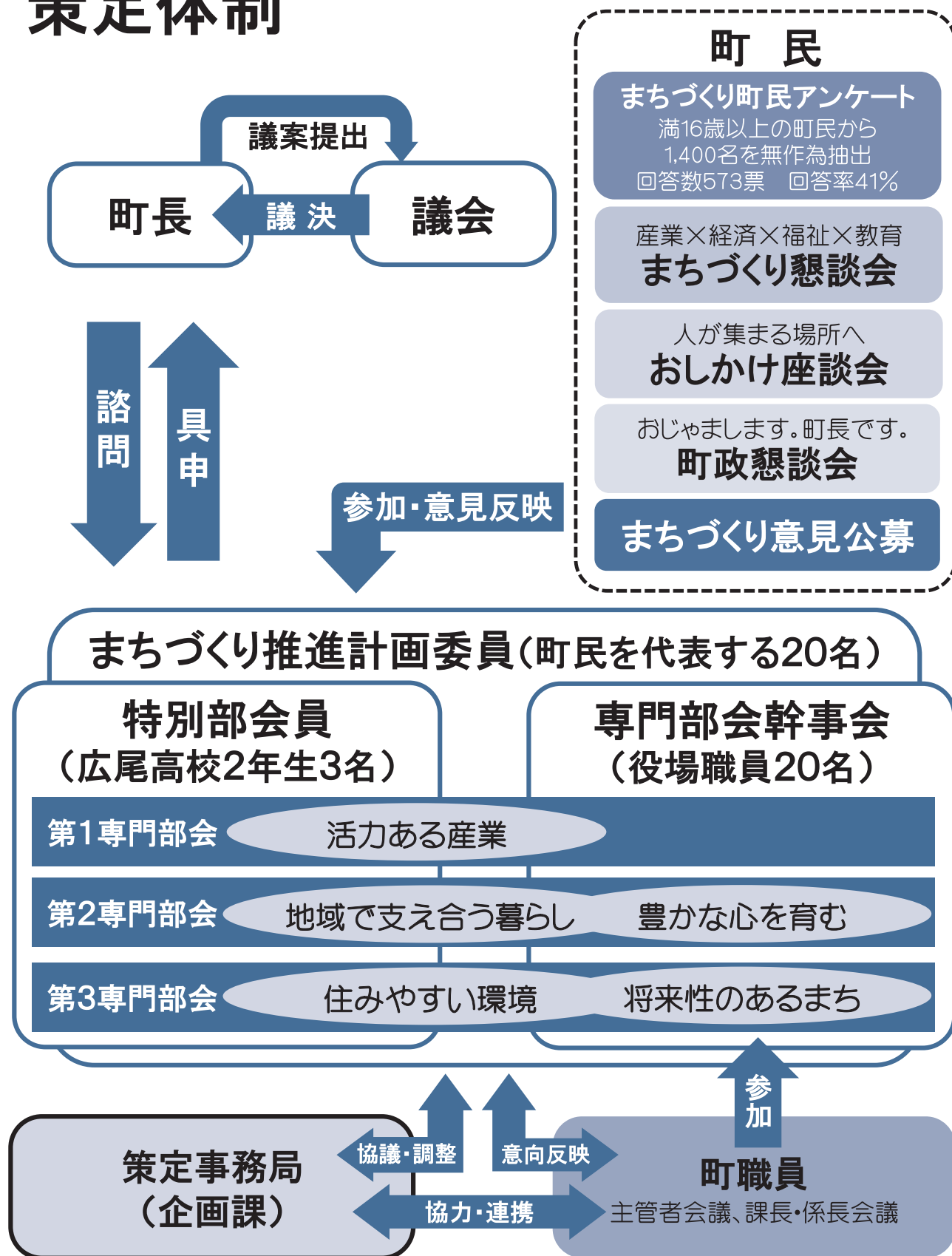
年 月 日	内 容	詳 細
平成31年(2019)年		
1月31日	第1回課長・係長会議	策定方針の協議、住民意識調査の調査項目の協議
2月4日	第1回主管者会議	策定方針及び住民意識調査の調査項目の審議・決定
2月15日	まちづくり町民アンケート	アンケート調査票の発送
3月4日	第1回まちづくり推進計画委員会	策定方針の承認、まちづくり町民アンケートの実施説明、第5次まち計第3期実施計画の変更承認
3月5日	平成31年第2回議員協議会	策定方針の説明
3月22日	まちづくり町民アンケート	アンケート結果(成果品)の納品
4月9日	管理職会議	専門部会員の募集
4月26日	第2回まちづくり推進計画委員会	素案策定に伴う諮問、専門部会の設置及び付託事項、専門部会員の指名、計画策定進行表、まちづくりアンケート結果
令和元年		
5月10日	専門部会職員準備会	計画素案の策定に伴う諮問内容、各専門部会の事務局長及び事務局次長候補者の互選、第1,2回専門部会まちづくりワークショップの実施方法、まちづくり懇談会・座談会の開催
5月15日	第1回専門部会(第3専門部会)	部会長、事務局長・次長の選任、まちづくりワークショップ①
5月22日	第1回専門部会(第2専門部会)	//
5月22日	第1回専門部会(第1専門部会)	//
6月10日	第3回まちづくり推進計画委員会	各専門部会の部会長及び事務局長・事務局次長の選任、まちづくり懇談会等の開催
6月10日	第2回専門部会(第1専門部会)	まちづくりワークショップ②
6月10日	第2回専門部会(第2専門部会)	//
6月10日	第2回専門部会(第3専門部会)	//
6月24日	まちづくり懇談会	テーマ「産業」「観光」(参加者17名)
6月25日	まちづくり懇談会	テーマ「子育て」「教育」(参加者9名)
6月26日	まちづくり懇談会	テーマ「防災・生活環境」「人づくり・地域づくり」(参加者19名)
7月5日	おしかけ座談会①	豊似老人クラブ(会場：豊似老人寿の家)(参加者12名)
7月11日	第3回専門部会(第1専門部会)	基本構想「まちのめざす将来像」、基本計画素案のたたき台の審議
7月12日	第3回専門部会(第3専門部会)	//
7月16日	第4回まちづくり推進計画委員会	計画の構成案、町人口動向分析及び将来人口推計、まちづくり懇談会の結果
7月17日	おしかけ座談会②	民生委員児童委員協議会(会場：コミセン大ホール)(参加者16名)

年 月 日	内 容	詳 細
7月16日	第3回専門部会(第2専門部会)	基本構想「まちのめざす将来像」、基本計画素案のたたき台の審議説明
7月30日	第4回専門部会(第2専門部会)	基本計画「重点プロジェクト」、基本計画素案のたたき台の審議①
8月7日	第4回専門部会(第3専門部会)	//
8月9日	第4回専門部会(第1専門部会)	//
8月26日	第5回専門部会(第3専門部会)	基本計画「重点プロジェクト」、基本計画素案のたたき台の審議②
8月29日	第5回専門部会(第1専門部会)	//
9月6日	第5回専門部会(第2専門部会)	//
9月18日	第6回専門部会(第1専門部会)	基本計画「重点プロジェクト」、基本計画素案のたたき台の審議③
9月26日	第6回専門部会(第3専門部会)	//
10月2日	第6回専門部会(第2専門部会)	//
10月7日	おしかけ座談会③	広尾中学校3年生総合的な学習(会場：広尾中学校武道場)(参加者60名)
10月18日	第7回専門部会(第3部会Aグループ)	基本計画素案のたたき台の審議④
10月25日	町政懇談会(音調津総合センター)	第6次まちづくり推進総合計画について、他(参加者10名)
10月31日	町政懇談会(野塚公民館)	// (参加者9名)
10月31日	町政懇談会(老人福祉センター)	// (参加者10名)
11月1日	町政懇談会(農村環境改善センター)	// (参加者6名)
11月1日	町政懇談会(丸山寿の家)	// (参加者6名)
11月14日	庁内打合せ	町長、副町長、教育長へ「たたき台」の説明
11月20日	第2回課長・係長会議	「たたき台」の概要説明、「たたき台」を「計画素案」原案とする作業の依頼
令和2年(2020)年		
2月3日	第5回まちづくり推進計画委員会	基本構想に係る「まちのめざす将来像」の決定、基本計画「計画素案」原案を「計画素案」とする審議①
2月25日	第6回まちづくり推進計画委員会	第5次まち計「実施計画」の見直し、基本計画「計画素案」原案を「計画素案」とする審議②
3月5日付	第7回まちづくり推進計画委員会	【書面】基本計画「計画素案」原案を「計画素案」とする審議③
3月24日付	第8回まちづくり推進計画委員会	【書面】基本計画「計画素案」原案を「計画素案」とする審議④
4月24日付	第9回まちづくり推進計画委員会	【書面】「計画素案」とする最終確認
5月19日	「計画素案」の具申	秋月委員長から村瀬町長へ具申書の手交
5月21日	所管課へ作業依頼	「実施計画」の策定作業開始

年 月 日	内 容	詳 細
6月9日	広尾町議会第2回定例会	中間報告(策定経過と今後のスケジュール)
6月22日	産業・経済団体等との懇談会①	広尾町校長会との懇談(参加者3名)
6月22日	主管者会議	「計画素案」を「計画原案」とする審議
6月24日	産業・経済団体等との懇談会②	広尾漁業協同組合との懇談(参加者4名)
6月29日	産業・経済団体等との懇談会③	広尾町体育連盟との懇談(参加者3名)
6月30日	産業・経済団体等との懇談会④	広尾町文化協会との懇談(参加者2名)
7月2日	産業・経済団体等との懇談会⑤	広尾町商工会との懇談(参加者3名)
7月3日	産業・経済団体等との懇談会⑥	ゆうゆう舎との懇談(参加者2名)
7月3日	産業・経済団体等との懇談会⑦	広尾町社会福祉協議会との懇談(参加者4名)
7月3日	産業・経済団体等との懇談会⑧	豊似文化協会との懇談(参加者1名)
7月6日	産業・経済団体等との懇談会⑨	広尾町農業協同組合との懇談(参加者4名)
7月7日	産業・経済団体等との懇談会⑩	広尾町観光協会との懇談(参加者3名)
7月8日	産業・経済団体等との懇談会⑪	広尾町町内会連合会との懇談(参加者11名)
7月16日	産業・経済団体等との懇談会⑫	広尾町森林組合との懇談(参加者3名)
6月29日～ 7月27日	まちづくり意見公募手続	「計画原案」に対する意見公募(広報紙、ウェブサイトなど) (提出意見39件(1名))
7月15日	議員協議会	「計画原案」の説明
7月30日～ 8月11日	懸案事項に関する町長ヒアリング	「計画案」策定に向けた協議、「実施計画」の協議
8月19日～ 26日	主管者会議	「計画原案」を「計画案」とする審議
9月3日	第10回まちづくり推進計画委員会	団体との懇談及びまちづくり意見公募の結果報告、「計画案」の内容説明
9月9日	広尾町議会 第3回定例会	「計画案」提案
9月17日	議員協議会	「計画案」の説明、「実施計画案」の説明、「計画期間における財政状況概要」の説明
11月6日	議案審査特別委員会	基本構想(第1章まちづくりの目標～第4章自然災害や感染症など脅威への対応とまちづくり)の審査
11月9日	議案審査特別委員会	基本計画(基本目標1～3)の審査
11月13日	広尾町議会 第6回臨時会	議案の訂正について
11月13日	議案審査特別委員会	訂正部分の審査、基本計画(基本目標4～5)の審査
12月8日	広尾町議会 第4回定例会	第6次広尾町まちづくり推進総合計画の議決

7 計画策定推進体制図

策定体制



第3章 広尾町の現状と課題

1 広尾町の現状

I 位置・地勢

広尾町は、十勝の最南端、北緯42度17.6分、東経143度18.9分に位置し、面積は596.54km²の広さを有しており、北は大樹町、南は日高管内のえりも町、西は日高管内の様似・浦河の両町に接しています。

十勝の中核都市・帯広市まで約84km、北海道の中心都市・札幌市まで約260km、また、とち帯広空港まで約52kmの距離にあります。

国道は、日高山脈を貫通し十勝と日高を結ぶ通称「天馬街道」と呼ばれる236号線、浦幌町から広尾市街を経由しえりも町へと繋がる336号線の2路線が交わり、十勝と日高を結ぶ交通の要所となっています。

また、広尾町は東側に太平洋、西側に楽古岳をはじめとする1,000m級の山々がそびえ立つ日高山脈に囲まれ、雄大な自然景観を形成しています。その山系に源を持つ豊似川、野塚川、楽古川、広尾川、音調津川の5本の河川が太平洋に注ぎ、豊似、野塚、楽古の3本の河川の両岸に酪農や畑作に適した大地が広がっています。



■ 帯広まで約84km

- ・自動車約 1 時間30分
- ・路線バス約 2 時間20分

■ とち帯広空港まで約52km

- ・自動車約 1 時間

■ 札幌まで約260km

- ・都市間バス約 4 時間40分

II 人口の状況

広尾町の人口は、昭和40(1965)年に総人口が13,598人となりピークを迎えましたが、1970年代の高度経済成長期に2,000人を超える人口が減少し、その後、人口が維持される時期もありましたが、1980年代後半に人口が減少し始めてから、一貫して人口減少が続いています。直近の平成27(2015)年国勢調査(総務省)によると、人口は7,030人となり、ピーク時から50年で人口は半減しました。

年齢区分別にみると、年少人口(0～14歳)については、昭和35(1960)年にピークを迎えた後、一貫して減少を続け、1990年代後半には高齢者人口を下回りました。生産年齢人口(15～64歳)については、1960年代後半まで増加を続けた後、一旦減少に転じ、1970年代後半に再び増加しましたが、1980年代以降は減少を続けています。高齢者人口(65歳以上)については、団塊の世代¹⁴が高齢期を迎えたことや平均寿命が延びたことなどから、現在まで一貫して増加を続けています。

人口動態をみると、自然増減については、平成12(2000)年までは平成10(1998)年を除き、出生数が死亡数を上回っていたため自然増の状態が続いていましたが、平成13(2001)年以降は出生数が死亡数を下回る自然減に転じ、出生数と死亡数の差は年々大きくなっています。一方、社会増減については、一部の年を除き転出数が転入数を上回る社会減が長く続いています。

※詳細は、令和2年2月に策定した「広尾町人口ビジョン改訂版」を参照。

III 産業の状況

第一次産業の漁業に関しては、十勝港において国内トップクラスの水揚げを誇るシシャモをはじめ、秋サケ、毛ガニ、コンブ、ツブガイといった北海道を代表する海の幸が水揚げされています。また、資源安定のために、サケマスふ化事業やシシャモの資源調査などを行い、漁獲量の安定供給に努めています。近年は海水温の上昇や回遊の変化など気象変動の影響により、期待する漁獲量を確保することができず、先行きも不透明な状況にあります。また、後継者など担い手の確保についても大きな課題となっています。

農業については、農業粗生産額が過去最高を更新するなど堅調に推移していますが、特に家族経営において労働力不足などの問題が深刻さを増しています。北海道立総合研究機構農業研究本部中央農業試験場による2030年の「農家人口・戸数の将来予想値(『2015年農林業センサスを用いた北海道農業・農村の動向予測』平成30年)によると、2030年における道内全体の販売農家戸数・販売農家の農家人口は、2015年と比べるとそれぞれ66%、59%と大きく減少することが予想されています。その中で広尾町は、販売戸数が約半減、農家人口が45%(55%減)、耕地面積が70%(30%減)、酪農頭数が横ばいの予想となっており、担い手確保の問題に直面することになります。

また、広尾町のみならず、農業王国十勝全体の海の物流を担うのが、重要港湾十勝港であり、ほかのまちにはない広尾町の強みとなっています。釧路税関支署十勝出張所が発表した令和元年の十勝港の貿易額は150億1,200万円となり、9年連続で100億円を突破しました。主な輸出品

目で見ると、米国やブラジルからの飼料用トウモロコシが最も多くなっているほか、中国や米国からの植物性油かすなどの飼料類も大幅に増加しており、石炭も安定的に輸入されています。国内への移出量は増えていますが、国外への輸出に関しては実績がなく、今後の拡大が課題となっています。

商工業については、広尾町の平成28年度の小売業の状況として、商店数が78店、従業員数が332人、年間商品販売額が60億2,300万円となっています。販売額は、その年によって増減を繰り返しながら低水準で推移しています。今後、人口減少がさらに進むなかで、商圈が町内に限られがちな商業は発展が難しい状況にあり、同時に経営主の後継者の確保、従業員など労働力の確保についても厳しい状況が続いています。

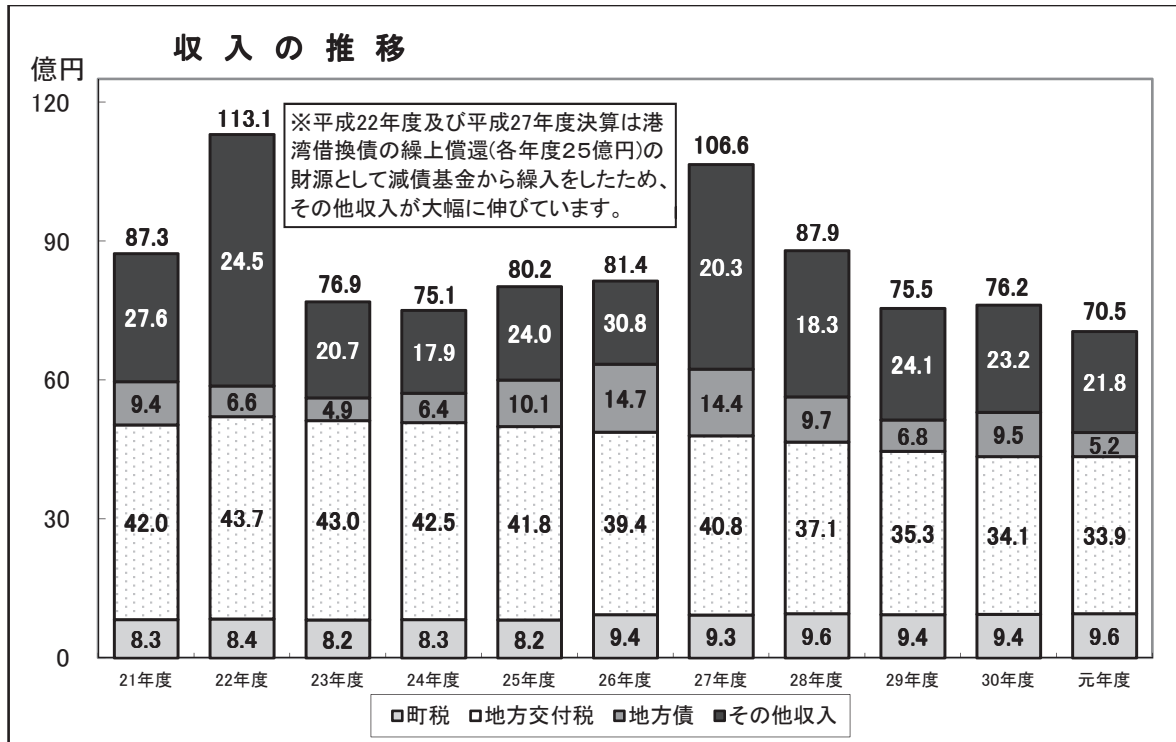
※詳細は、町が毎年発行する「広尾町町勢要覧資料編」を参照。

IV 財政の状況

① 一般会計の収入と支出の状況

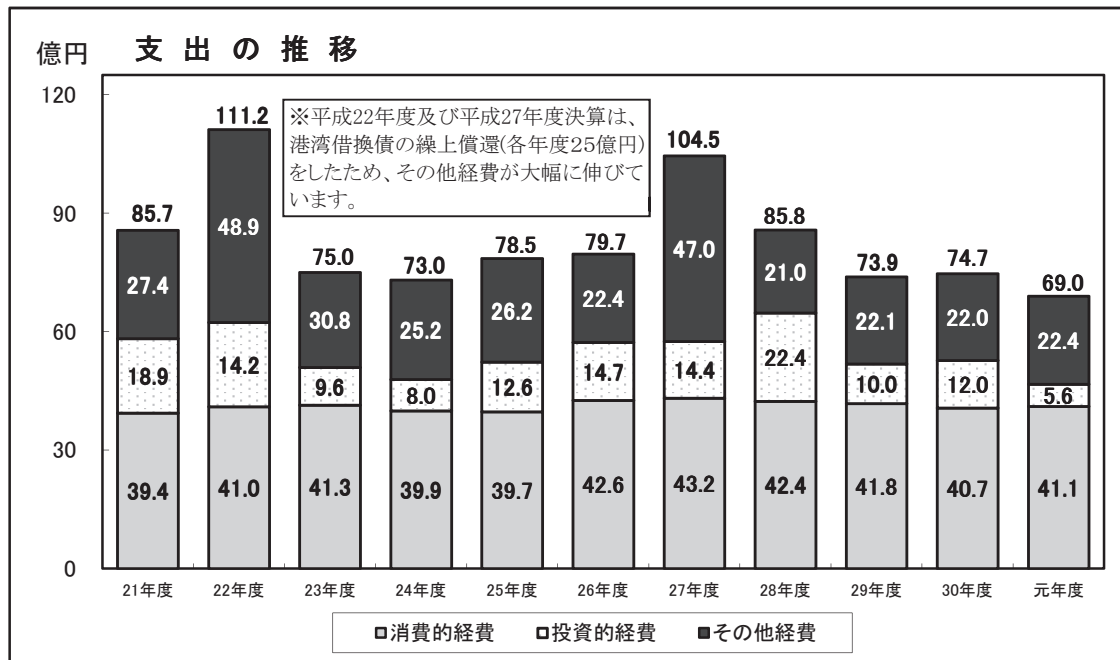
収入について、大きな割合を占める地方交付税は、平成22年度以降減少が続いており、今後も厳しい見通しに立たなければならない状況となっています。

町税については、飼料工場の進出により平成26年度に増加して以降、ほぼ横ばいの状況にあります。しかし、令和元年度の歳入全体における町税の割合は13.8%であり、また使用料等を合わせた自主財源の歳入全体に対する割合は31.9%となっており、地方交付税等の依存財源に大きく左右される構造にあります。



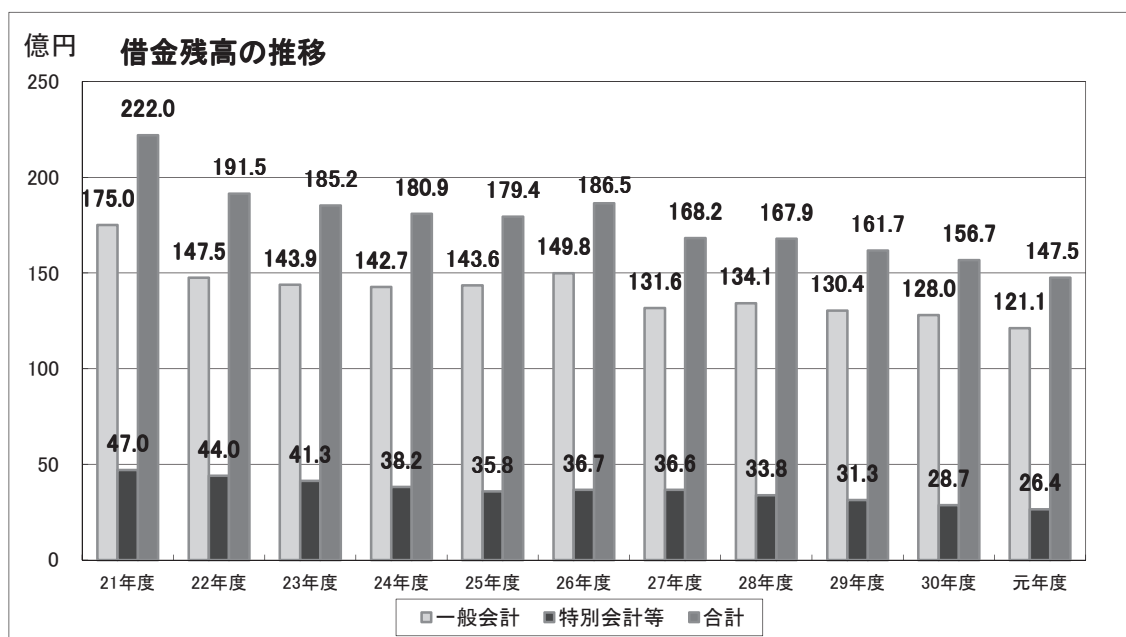
支出につきましては、広尾町第5次行政改革大綱に基づき、職員の適正な定員管理による人件費抑制や、事務事業の見直しなど、支出の抑制に努めていますが、少子高齢化の対応のための扶助費や、建物の老朽化による維持補修費などの消費的経費が増加傾向にあります。

限られた財源の中で、様々な行政ニーズに対応するために、今後も行政改革に取り組む必要があります。

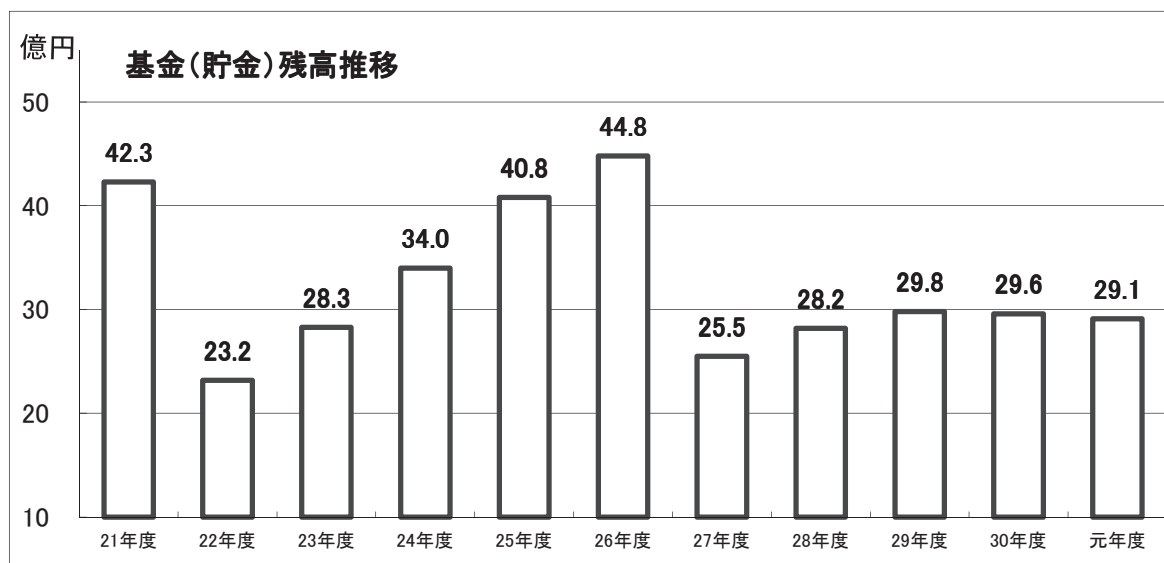


② 借金残高及び貯金残高の状況

令和元年度末の町の借金残高は、港湾借換債27億9,000万円を含む会計全体で148億円となりました。平成11年度をピークに減少してきてはいますが、依然として高い水準にあります。このことは次世代に大きな負担をかける状態であること、さらには今後の金利の上昇に対して脆弱な状態にあることをしっかりと認識する必要があり、克服していかなければならない大きな課題であります。今後も、引き続き、第5次行政改革の取組を基本に健全な財政運営に努めていきます。



令和元年度末の町の貯金である基金残高は29億円となりました。借金の返済財源として、引き続き減債基金への計画的な積み立てを継続して実施していきます。



③ 各財政指標の状況

【経常収支比率】

財政構造の弾力性(ゆとり)を判断するための指標です。

地方税・普通交付税などの、使いみちを制限されない毎年収入される性質の収入(経常的な収入)に対する、人件費・公債費・扶助費など毎年支出される性質の支出(経常的な支出)の割合です。この割合が低いほど、財政にゆとりがあり、さまざまな状況の変化に柔軟に対応できることを示します。

平成30年度の経常収支比率の全道平均は92.3%、本町は91.2%でした。令和元年度の本町の経常収支比率は91.2%で、公債費の増加により、近年は比率も増加傾向にあります。

【実質公債費比率】

一般会計の借入金の返済額及び公営企業等他の会計や近隣市町村との一部事務組合のこれに準じる繰出金、負担金等を含めた額の大きさを見るための指標で、資金繰りの危険度を示します。

平成30年度の実質公債費率の全道平均は7.1%、本町は12.9%でした。令和元年度の本町の実質公債費比率は14.5%で将来負担比率と共に財政健全化法の基準を下回っています。

【将来負担比率】

一般会計の借入金(町債)や将来支払っていく可能性のある負担等の残高の程度を見るための指標で、将来財政を圧迫する可能性が高いかどうかを示します。

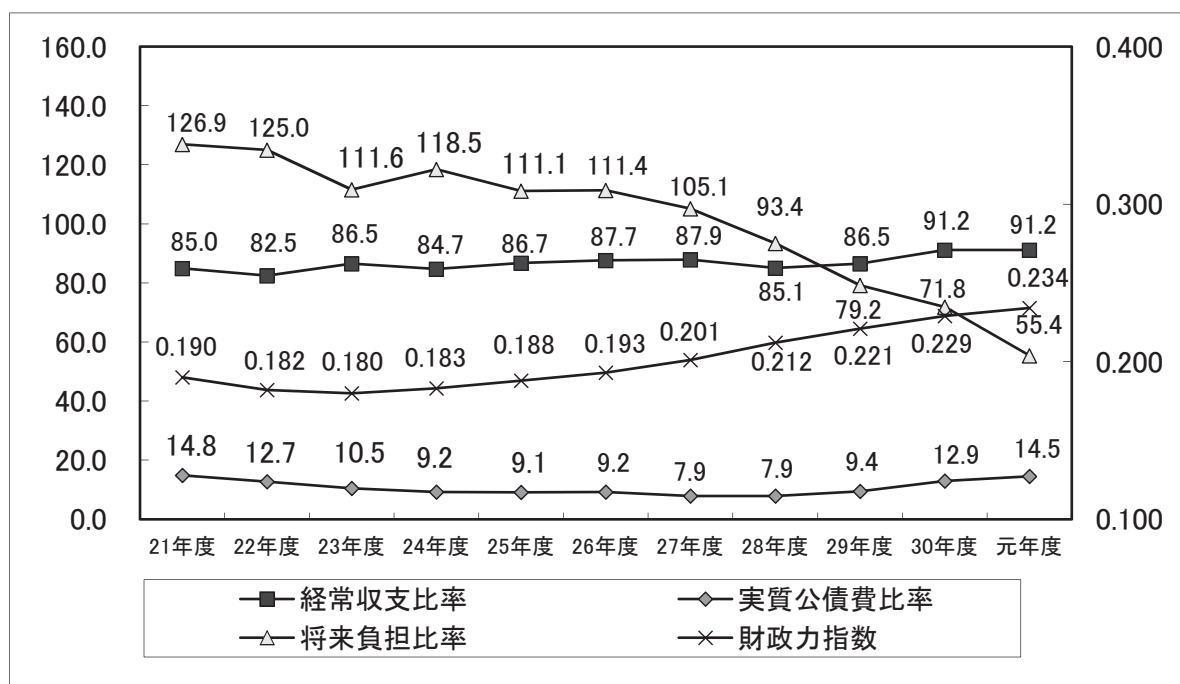
平成30年度の将来負担比率の全道平均は48.4%、本町は71.8%でした。令和元年度の本町の将来負担比率は55.4%となりました。

【財政力指数】

基準財政収入額を基準財政需用額で割って得た数値の過去3年の平均値のことで、地方公共団体の財政に力があるかどうかを表す指標です。

財政力指数が高いほど財源に余裕があるとされ、1を超える地方公共団体は普通交付税の不交付団体となります。

平成30年度の財政力指数の全道平均は0.473、本町は0.229でした。本町の財政力指数はここ数年ほぼ横ばいの状況となっており、令和元年度は0.234となりました。



2 まちづくりの主要課題

地方の人口減少が加速し、目まぐるしく変化する現代社会において、広尾町を住み良く魅力的なまちとして次世代にバトンタッチしていくためには、町民が日常の中で感じるまちの課題や町内の各団体が抱える懸案事項などをきめ細かく捉え、様々な主体が連携を深めながら、すべての世代が生き生きと安心して暮らすことができるまちづくりを進めていくことが重要です。まちづくり町民アンケートや各種懇談会で町民から出された様々な意見を踏まえ、まちづくりの主要な課題を次のとおり5つに分類して整理しました。

I 産業

第一次産業に共通する課題として、担い手不足が挙げられます。後継者を確保できず、雇用労働力の確保にも苦慮する経営体が多くあります。今後、高齢化の進行や人口減少の加速とともに従事者がさらに先細りすることが予想され、働き手を確保しなければ、産業自体が成り立たなくなること懸念されます。特に水産業では、長年、資源管理に取り組んでいますが、近年、魚の回遊の変化などによる漁業資源の減少が顕著で、漁業従事者の減少も進んでおり、対策が急務となっています。

一方、商工業では、個人経営主の高齢化が進み、特に後継者のいない飲食業の廃業が相次ぐなど、中心市街地の魅力が急速に低下しています。このことが観光面での集客にも影を落とす形となっており、まちの経済にも影響を及ぼしています。

また、広尾町の産業の強みである十勝港については、飼料コンビナートの進出以降、新たな企業進出が無く、十勝港の優位性を町外企業等にアピールするなど、企業誘致を進める必要があります。

II 福祉

地方では、人口減少・少子高齢化の進行による人口構造の急激な変化に起因する様々な福祉的課題が顕在化しています。広尾町では、子どもたちを健やかに育む環境を整えるとともに、何らかの支援を必要とする方々に対する適切な医療・介護・福祉サービスの提供に努めてきましたが、子育て環境の面では、保育士の人材確保が課題となっていることに加え、保育所や学童保育施設に対する保育ニーズが多様化し、その対応が強く求められています。一方、高齢者福祉の面では、団塊の世代が後期高齢者となる令和7年前後から、これまで支える側であった世代が、医療・介護・福祉サービスを受ける側になることで、介護する側と介護を受ける側のバランスが崩れることが懸念されます。介護人材が慢性的に不足していることも相まって、介護を必要とする人が十分な介護を受けることができない事態の発生が危惧されています。

III 教育

広尾町の教育は、平成18年度に開始した連携型中高一貫教育¹⁵や平成31年に導入したコミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)など、広尾の子ども達を地域ぐるみで守り育てる環境を

整えてきました。

義務教育については、児童生徒数の減少に伴う学校統合を進め、2小1中体制(豊似小、広尾小、広尾中)を確立しましたが、今後、少子化の流れの中で、各校の小規模化が進むことが予想されます。

高校教育については、広尾高校の存続に向けて様々な支援策を講じ、その魅力向上に努めてきましたが、同じく少子化の影響により、生徒確保の面で厳しい状況となることが予想されます。

全国的には、令和2年度から始まった新学習指導要領¹⁶の下、これからの時代に求められる能力として、外国語教育、プログラミング教育¹⁷などが導入され、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点での授業改善が重要視されるとともに、いじめの未然防止、配慮が必要な児童生徒への適切な指導、不登校児童生徒への対応、教職員の働き方改革など課題が山積しています。

社会教育(成人教育)や生涯学習の分野では、第5次まちづくり推進総合計画に登載していた生涯学習センターの建設が困難な状況であり、活動環境が整わないことと、人口減少も相まって学習活動の停滞が危惧されています。サークル活動や少年団活動、文化活動も同様であり、時代にあった学習活動に転換していく必要があります。加えて、郷土の歴史やまちの文化財などを次世代に伝承する取組についても、絶やすことなく続けていくことが大変重要です。

Ⅳ 住民生活

広尾町は、過去に地震や津波、暴風など数多くの自然災害の被害を受けており、建築物の耐震化や災害用品の備蓄、自主防災組織の結成支援など、地域防災力を高める取組を進めてきました。高い確率で発生が予想される千島海溝・日本海溝を震源とする巨大地震など、大災害の発生に備えて、地域防災力の3要素「自助・共助・公助」をさらに高めていく必要があります。

住民生活においては、核家族化や高齢化が進み、高齢者を狙った悪質犯罪の発生、買い物の利便性低下、空き家の増加など、暮らしの安心・安全や住みやすさに直結する様々な課題が深刻さを増しています。

また、北海道民は、平成30年の胆振東部地震によるブラックアウト(長期間大規模停電)を経験し、電力供給体制の脆弱さを目の当たりにしました。生活に必要なエネルギーをどのように確保していくのかについて、私たち一人ひとりがより意識を高める必要があります。

さらに、国連による持続可能な開発のための17のグローバル目標からなる開発目標「SDGs(エス・ディー・ジーズ)」¹⁸が示され、日本を含む様々な国や地域でその取組が行われています。広尾町においても、令和2年に策定した「第2期広尾町総合戦略」に盛り込んだ政策と17のグローバル目標との関係を戦略の中に位置付けており、地方創生の取組やごみの減量など身近な住民生活での取組を通じて地球規模の課題にも貢献し、持続可能なまちづくりを進める機運を高めることが求められています。

加えて、まちづくり町民アンケートによると、公園など子ども達の遊び場に関する町民の満足度が低く、公園の充実を求める声が多くあることから、今後の公園・緑地のあり方について、町民の意見も取り入れながら検討する必要があります。

V ひとづくり、地域づくり

広尾町で生まれ育った子ども達は、住んでいるまちに魅力を感じなくなると、都市など他のまちに目を向けてしまいます。持続可能なまちづくりを進めるためには、魅力あるまちとして次の世代にバトンタッチしていくことが重要です。魅力あるまちをつくるには、町民や町内会、事業所などと行政が対等なパートナーシップを築き、町民一人ひとりが主役としてまちづくりに積極的に関わる意識を持つことが必要であり、そのための「ひとづくり」がどの分野においても大切です。

近年、まちづくりの中核を担う町内会について、役員の成り手や葬儀の手伝いの人材が確保できないなどの問題が発生し、一部地域においてコミュニティ機能の低下が見られます。

また、広報・広聴については、スマートフォンなど情報通信機器の普及が進み、情報のやりとりに関する利便性が向上したことにより、情報発信の即時性と多様性が求められています。

さらに、持続可能なまちづくりを進めるためには、安定した財政基盤の確立はもちろん、移住促進や地域間交流など、町外の人や地域との関係を深めることが重要です。特に地域間交流は、町外から多くの人を訪れたり、他の地域を訪れたりすることで、町民が自分のまちの価値に気づき、その価値や魅力を他の地域の住民にアピールするなど、あらゆる面でまちの活性化に繋がることから、人口減少時代におけるまちづくりの重要な要素であると言えます。